

第2章 調査結果の概要—年齢別集計を中心として—

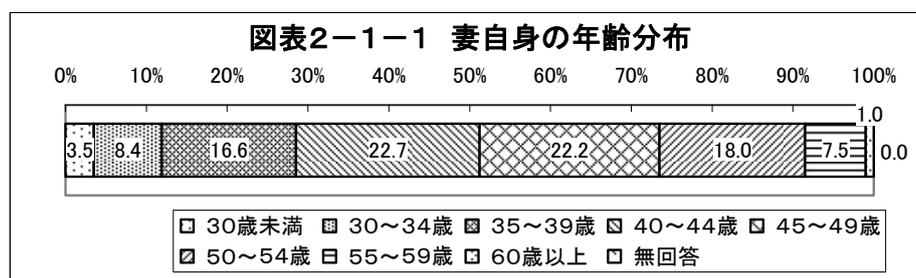
第2章では、今回の調査の内容が網羅的に理解されることを期待して、前もって論点を立てずに、今回の調査結果を紹介していくこととしたい。その際、単純集計結果のみをみることよりは何らかの項目を共通の軸として集計した結果をみていくことが生産的である。ここでは妻の年齢をその軸とすることとし、年齢（5歳きざみ）別に集計した結果を順次みていくこととしたい。個人を対象にした調査に関しては、他の項目によるよりも年齢別の集計は、データの豊富な解釈を可能にさせる場合が多いからである。また、本体調査で夫が管理職層と非管理職層とに分けて調査対象が抽出されており、今回の調査もその影響下にある。年齢別の集計をみることによって、すぐ後で述べるように、その抽出方法に伴いデータをみる場合に必要となる配慮を間接的に行っていることとなる面もある。

第1節 回答者（妻）の主な属性、就業状態

「妻調査」回答者の基本的な属性（年齢分布と学歴分布）及び就業状態をみておこう。

1. 年齢分布

「妻調査」回答者の年齢（5歳きざみ）分布をみると、40～44歳が22.7%と最も多く、次いで45～49歳が22.2%、50～54歳18.0%などとなっている。30歳台までが3割弱であるなど、相対的に若い層の割合が小さいことが窺われる。これは、「労働時間・本体調査」が調査対象者を管理職層と非管理職層とに分けてそれぞれ同じ人数を調査した結果、その配偶者である妻を対象とした「妻調査」では、第1章でみたように、年齢が相対的に高いと考えられる管理職層の妻の方が多くなっていることによるものと考えられる。なお、「労働時間・本体調査」が60歳未満を対象としていることから、「妻調査」の回答者において60歳以上の割合が1.0%にとどまっている（図表2-1-1）。



ちなみに、総務省統計局「就業構造基本調査」により25～59歳で夫が「雇用者」である妻の年齢分布を算定し、今回の「妻調査」の場合と比較したのが次の「参考」表である。「就業構造基本調査」の既存の報告書には、夫の雇用形態別に妻の年齢が集計されたものが見当たらなかったため、第一次接近として夫が「雇用者」の妻の年齢を使用している。正社員以外の雇用者の影響があるものの、配偶者（妻）のいる雇用者は大半が正社員であると考えられることから、大きな齟齬はないと思われる。これをみると、今回の「妻調査」の場合には、

(参考)今回調査と就業構造基本調査との25～59歳における夫が正社員(又は雇用者)の妻の年齢分布の比較 (%)

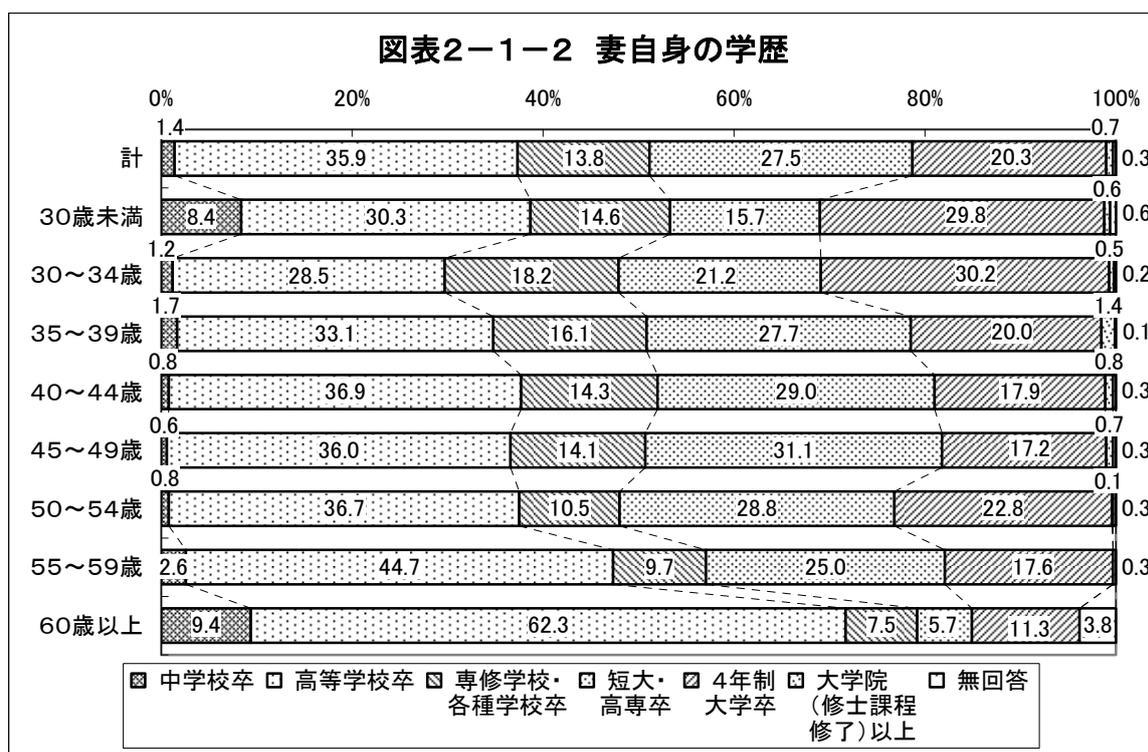
	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳
今回の妻調査(夫が正社員)	3.0	8.5	16.9	23.1	22.5	18.3	7.6
就業構造基本調査(夫が雇用者)	6.8	15.1	17.4	15.8	14.8	14.5	15.6

相対的に年齢の若い層の割合が相当低く、中年層以降の年齢層の割合が相当高くなっていることは間違いのないところである。

したがって、社会全体の傾向を反映しているかどうか、すなわち代表性に関しては、年齢計のデータにはそれほど信を置くことはできにくい状況にあるが、その予想される偏りは同時に年齢別のデータをみることによってある程度カバーできるものと考えられる。なお、「労働時間・本体調査」で対象としていない60歳以上については、夫と妻の年齢差があることから「妻調査」で60歳以上の回答者(妻)がいるとしても、それは実際の60歳以上全体の状況を現すものでは到底ない。以下で60歳以上のデータを示してはいるが、あくまで参考程度に扱われるべきものである。

2. 学歴分布

「妻調査」の回答者である妻自身の学歴をみておこう。年齢計のデータをみておくと、高卒が35.9%ともっとも多く、次いで短大・高専卒27.5%、4年制大学卒20.3%などとなっている。これを年齢別にみると、30歳未満に比べ30～34歳では中卒や高卒の割合が低下し、一方、専修学校・各種学校卒や短大・高専卒などの割合が上昇している。ただしこれは、結婚している女性の学歴分布であり、それぞれの年代の女性全体の学歴分布ではないことには留意する必要がある。それ以降の年齢層においては、大卒や専修学校・各種学校卒の割合は

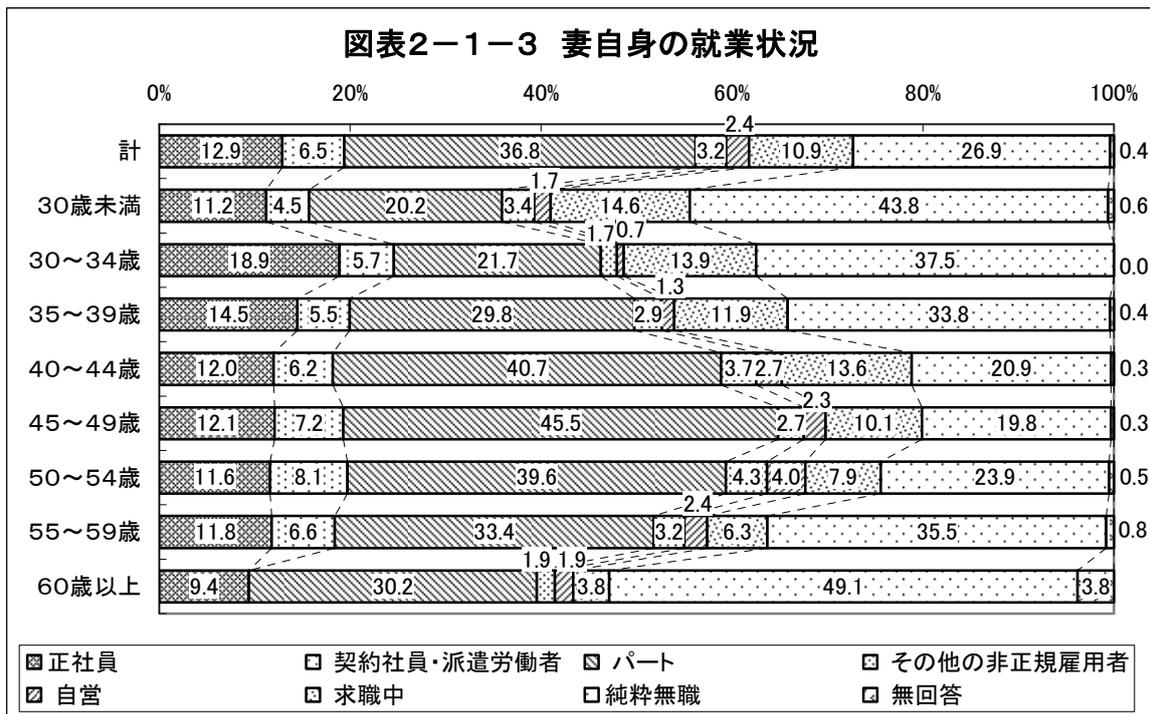


年齢が高い層ほど概ね低くなる傾向がみられる一方、高卒や短大・高専卒の割合は年齢が高い層ほど概ね高くなる傾向がある。ただし、短大・高専卒の割合は、45～49歳の31.1%をピークにそれ以降の年齢層では割合は低くなっている（図表2-1-2）。

3. 現在の就業状態

妻自身の就業状態をみると、年齢計では6割程度が就業しており、30歳未満が4割程度で以降45～49歳の7割程度まで年齢の上昇とともに就業者の割合は高くなった後、それ以降は50～54歳ではやや低くなり、55～59歳では6割を下回るまでになる（図表2-1-3）。

「自営」（用語の意義は図表の脚注参照。「自営」には家族従業者の場合も含まれると解される）の割合は大抵の年齢層で1～2%程度で、就業者のうちほとんどは雇用者である。雇用の雇用・就業形態をみると、「正社員」の割合は30歳未満の11.2%から30～34歳では18.9%と高くなった後、35～39歳14.5%、40～44歳12.0%と低くなり、それ以降の年齢層においては12%程度で推移している。非正規雇用者の中では「パート」の割合が格段に高く、30歳前後の年齢層における20%程度から年齢が高くなるにしたがって高くなり、45～49歳で45.5%とピークとなり、それ以降は低くなっている。



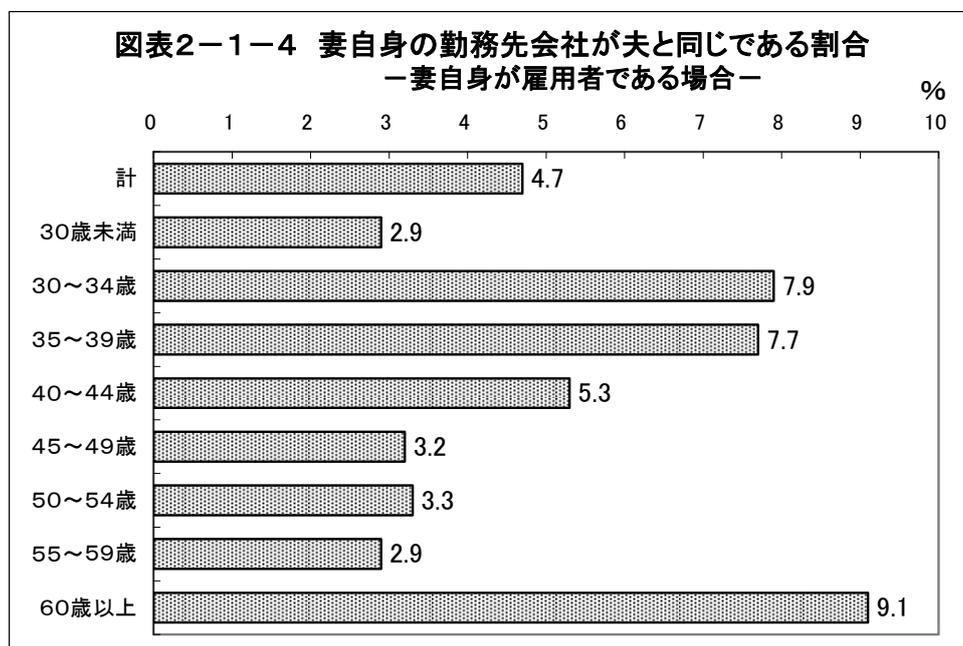
（注）それぞれの就業形態等の調査票上の設問文は次の通りである。（以下同じ。）

- ・「正社員」・・・正規の社員・従業員として働いている（休業中含む）
- ・「契約社員・派遣労働者」・・・契約社員、派遣労働者として働いている
- ・「パート」・・・パートタイマーとして働いている
- ・「その他の非正規雇用者」・・・その他の就業形態で会社などに雇用されて働いている
- ・「自営」・・・自営の仕事をしている
- ・「求職中」・・・現在働いていないが、仕事を探している
- ・「純粹無職」・・・現在働いていないし、当面仕事をするつもりもない

上述のように、年齢別の就業者の割合は 45～49 歳をピークとする山型のプロフィールを描いているが、その対である無業の割合は、当然ながら谷型を描いている。この谷型を形成しているのは、無業のうち「純粹無業」である。一方、無業のうち「求職中」の割合は、30 歳前後の年齢層で 14%程度と相対的に高く、35～39 歳で 11.9%と一旦低くなった後 40～44 歳で 13.6%と再び高くなっている。それ以降の年齢層では、「求職中」の割合は順次低くなる。

（夫と勤務先が同じ割合）

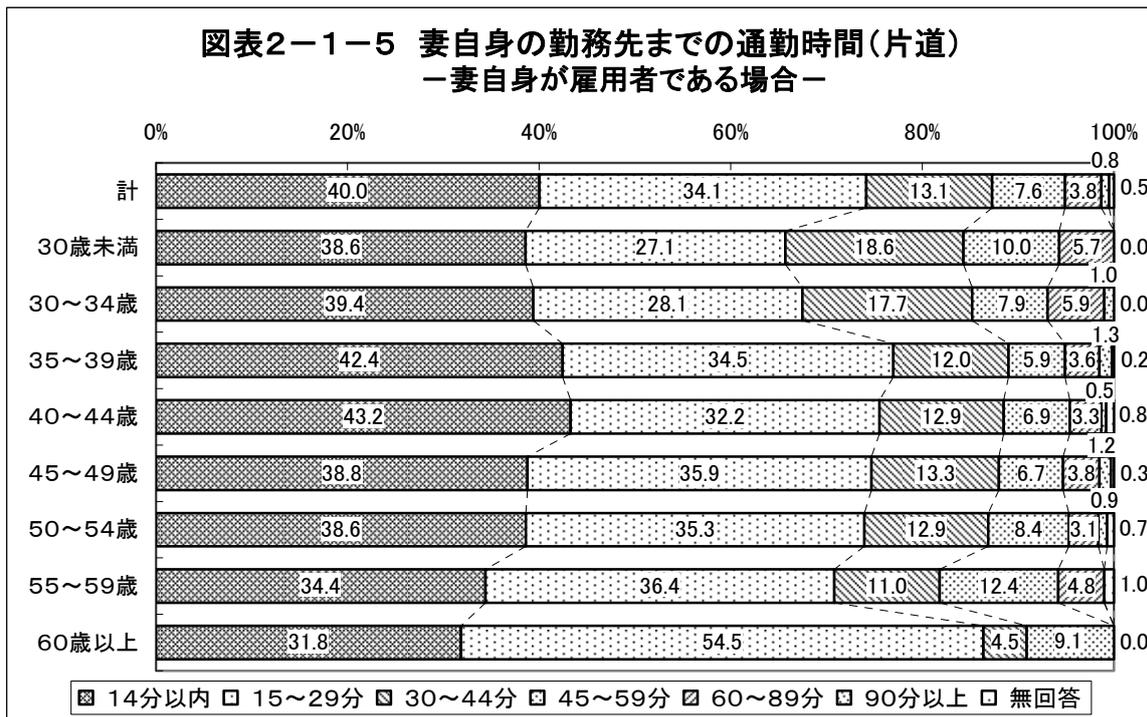
妻自身の就業に関する周辺情報として、雇用されて働いている場合、勤務先の会社が夫と同じかどうか尋ねた。その結果をみると、年齢計で 4.7%が同じ会社に勤めているとしており、30～34 歳で 7.9%、35～39 歳 7.7%と相対的に高くなっている一方、30 歳未満や 45 歳以降の年齢層では 3%前後となっている。なお、後述のように「夫婦のなれそめ」として「職場が同じだった」が各年齢層とも 3 割程度あることとあわせれば、30 歳台で相対的に高いことは、職場結婚後しばらくは同じ会社で勤務している状態が表れているものと考えられる。逆からみれば、多くの場合、職場結婚後数年を待たずして夫婦のいずれか（多くは妻であろう）が会社を退職していることも意味している（図表 2-1-4）。



（注）夫婦で勤務する事業所が異なる場合も含む。

4. 通勤時間（雇用者である場合）

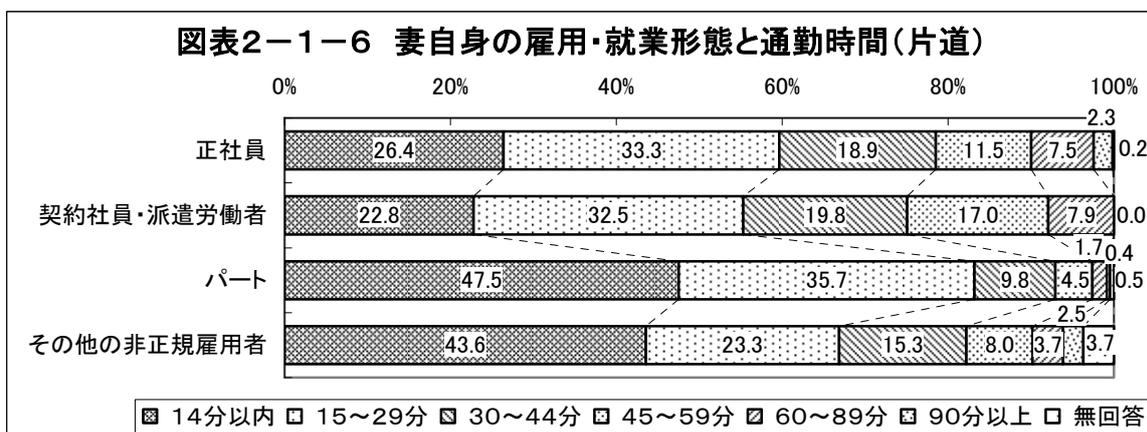
妻自身が雇用者である場合に、勤務先までの通勤時間（片道）をみると、年齢計では 14 分以内」が 40.0%、「15～29 分」34.1%と概ね 4 分の 3 が 30 分以内となっている。30 分未満の割合を年齢別にみると、30 歳未満や 30～34 歳では 60%台半ばであるものが、35～39



歳で76.9%ともっとも高くなり、その後年齢が上がるにつれて徐々に低くなっている（図表2-1-5）。

（雇用・就業形態別の通勤時間）

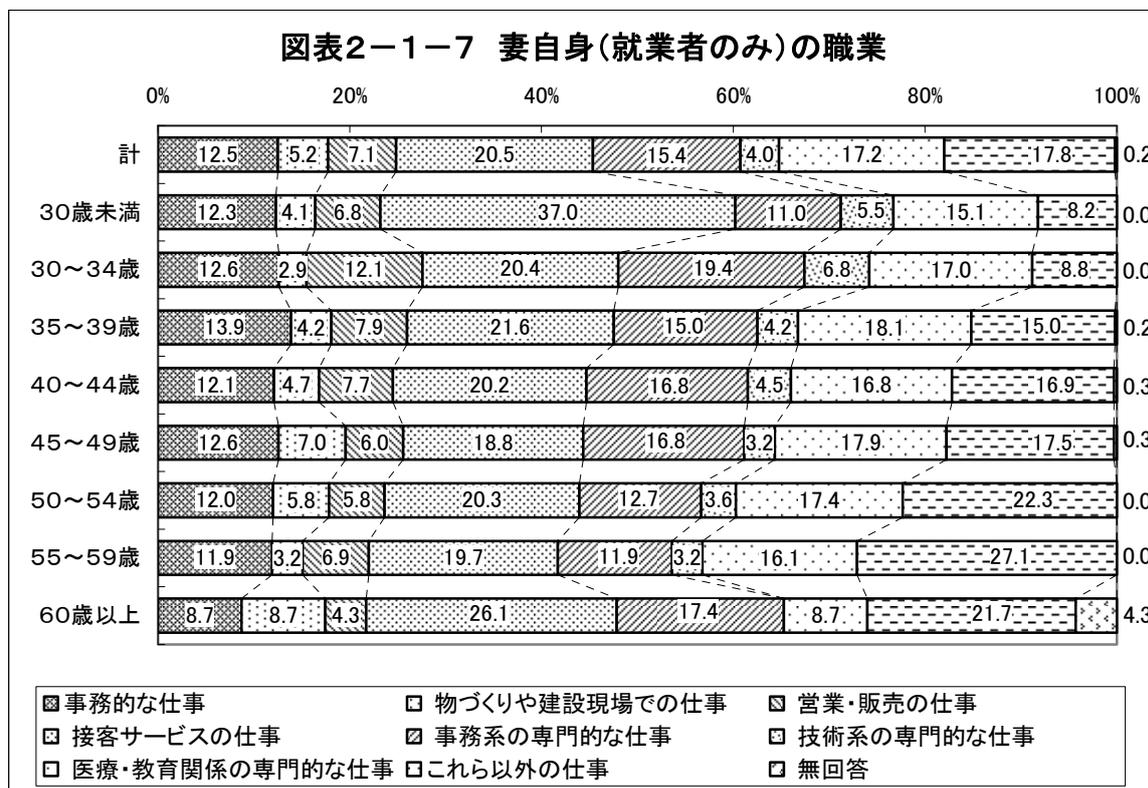
通勤時間は、雇用・就業形態によってかなり異なるのが一般的であり、今回の調査でも同様の結果がみられている。すなわち、妻自身が正社員である場合は通勤時間が30分未満である割合は59.7%であり、また、契約社員・派遣労働者の場合も55.3%と、両者とも60%を下回っている。これに対してパートである場合は、30分未満が83.2%と8割を超え、その他の非正規雇用でもこれよりやや低いものの66.9%と相対的に高くなっている。なお、これらの割合の差が、主に「14分以内」のごく近い場所への通勤となっている割合の違いによる面が大きいこともわかる（図表2-1-6）。



なお、通勤時間は住居地の地域性にも影響を受けることが考えられる。今回の調査では、住まいの場所の都市的属性を尋ねており、それ別に通勤時間を集計した結果を掲げておくと、30分未満の割合（14分以内の割合）は、「大都市の中」が65.1%（32.9%）、「大都市の郊外」59.8%（31.6%）、「都市の中」74.8%（37.5%）、「都市の郊外」75.1%（39.3%）、「その他の地域」83.9%（50.8%）となっている。

5. 妻自身の職業

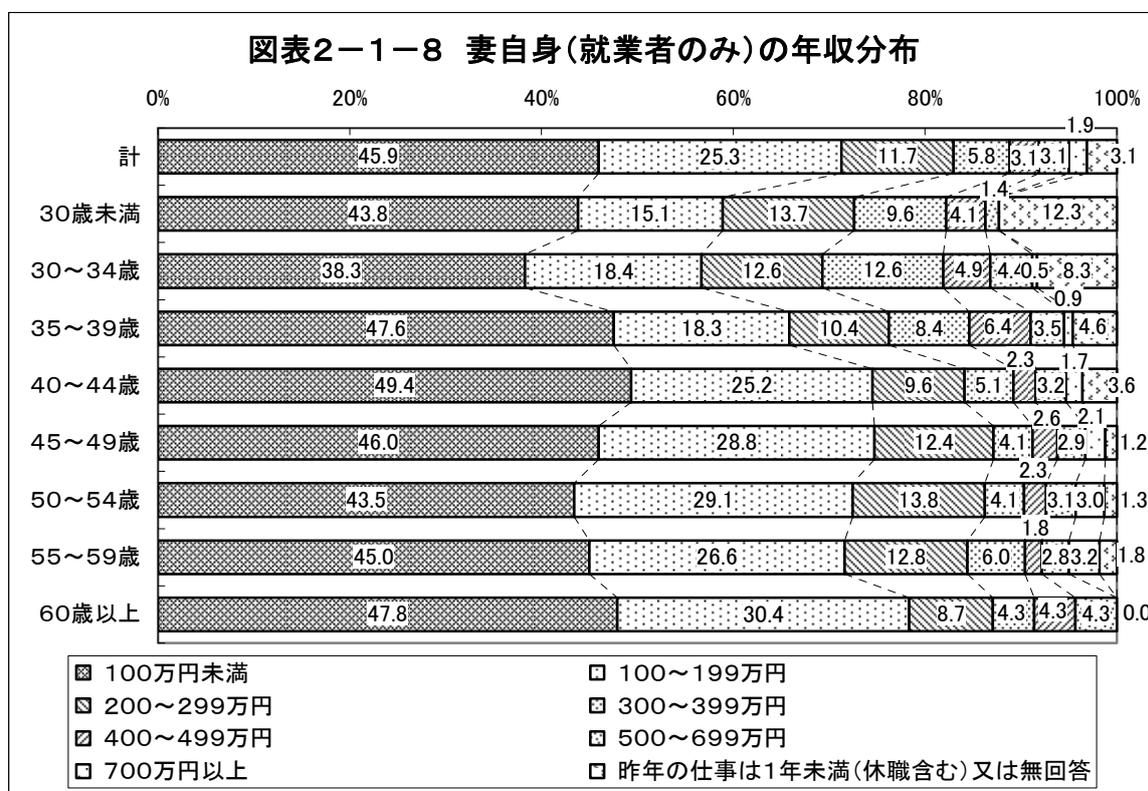
妻自身が就業者である場合に、その職業（仕事の種類）をみると、年齢計でみて「接客サービスの仕事」が20.5%でもっとも高い割合となっており、次いで「これら（他の選択肢）以外の仕事」（17.8%）、「医療・教育関係の専門的な仕事」（17.2%）、「事務系の専門的な仕事」（15.4%）などの順になっている。年齢別にみて特徴的な職業を挙げると、まず「接客サービスの仕事」の各年齢層に占める割合は30歳未満での割合（37.0%）が高く、その他の年齢層では20%前後となっている。「これら以外の仕事」は、年齢が上がるにつれて高くなっている。「医療・教育関係の専門的な仕事」は、多少のこぼこはあるものの、30歳以上の各年齢層では16~18%程度の割合となっているのに対して、「事務系の専門的な仕事」は30~34歳（19.4%）での割合がもっとも高く、それ以降の年齢層では徐々に低くなっていく傾向がややみられる。割合の水準はあまり高くないものの「技術系の専門的な仕事」（年齢計で4.0%）でも、事務系同様、年齢が上がるにつれて割合が低くなる傾向がみられている。また、「事務的な仕事」（同12.5%）が各年齢層とも12%程度の割合であること、「物づくり



や建設現場での仕事」(同 5.2%) が 40 歳台から 50 歳台前半が相対的にやや高い割合を示していること、「営業・販売の仕事」(同 7.1%) が 30～34 歳で相対的に高くなっているものの、他の年齢層でも 6～8%程度で推移していることなども特徴であるといえる(図表 2-1-7)。

6. 妻自身の年収

妻が就業者である場合にその年収をみると、年齢計でみて「100万円未満」が 45.9%ともっとも多く、次いで「100～199万円」25.3%、「200～299万円」11.7%などとなっている。100万円と 300万円とで 3つの層に区分すると、100万円未満が上述の 45.9%、100～299万円が 37.0%、300万円以上が 13.9%となっている¹。この3つの層の割合を年齢階層別にみると、100万円未満は 40～44歳での割合が 49.4%ともっとも高いのを始め、30歳台後半から 40歳台にかけて高くなっている。100～299万円については、総じて年齢が上がるにつれて割合が高くなる傾向がみられ、30歳未満での割合が 28.8%でもっとも低く、50～54歳が 42.9%ともっとも高くなっている。一方、300万円以上の割合は、30～34歳での割合が 22.4%でピークとなっており、その上下の年齢層である 35～39歳(19.2%)や 30歳未満(15.1%)を除けば、10%台前半にとどまっている(図表 2-1-8)。



¹ 年収をこの3つの層に区分する背景的な想定は、100万円未満は主にパート、100～300万円は主にフルタイム型非正規雇用(契約社員や派遣労働者など)と再就職型の正社員、300万円以上は主に継続就業型の正社員にそれぞれ対応する年収であるということである。

なお、今回の調査における雇用・就業形態別に集計した年収分布のデータを掲げておくと、次の表のようになっている。上述の年収分布の状況は、雇用・就業形態別の就業状況と密接な関連があるといえよう。

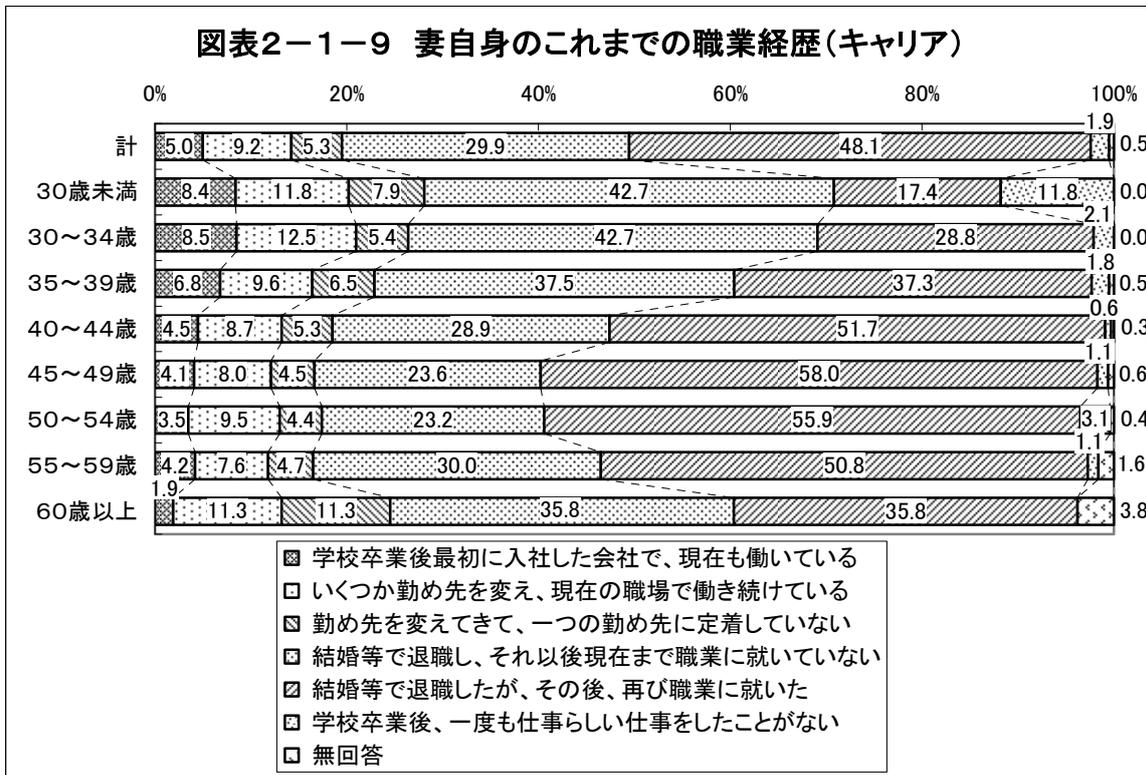
(参考)雇用・就業形態別の年収分布

	100万円未満	100～299万円	300万円以上	昨年の仕事は1年未満(休職含む)又は無回答
正社員	3.2	37.1	56.2	3.5
パート以外の非正規雇用者	39.8	48.8	6.9	4.5
パート	62.1	34.1	1.4	2.6
自営	52.5	34.1	10.9	2.5

7. これまでの職業経歴(キャリア)

妻自身の現在までの職業経歴を典型的に尋ねた結果をみると、年齢計では「結婚等で退職したが、その後、再び職業に就いた」(「再参入型」)が48.1%でもっとも多く、次いで「結婚等で退職し、それ以後現在まで職業に就いていない」(29.9%/「結婚等退職後無業型」)、「いくつか勤め先を変え、現在の職場で働き続けている」(9.2%/「数カ所転職後定着型」)などとなっている。「学校卒業後最初に入社した会社で現在も働いている」(「初職定着型」)は5.0%となっている。とはいえ、こうした職業経歴は完結したものではなく、現在までの状況であることは念頭に置く必要がある。年齢別にみて、年齢が高い層ほど「再参入型」の割合が増え、一方で「結婚等退職後無業型」が減る傾向にあるのはある意味において当然で

図表2-1-9 妻自身のこれまでの職業経歴(キャリア)



ある。また、「初職定着型」や「数カ所転職後定着型」などで年齢が高くなるほど割合を逡減させているのもそうした面が大きい（図表2-1-9）。

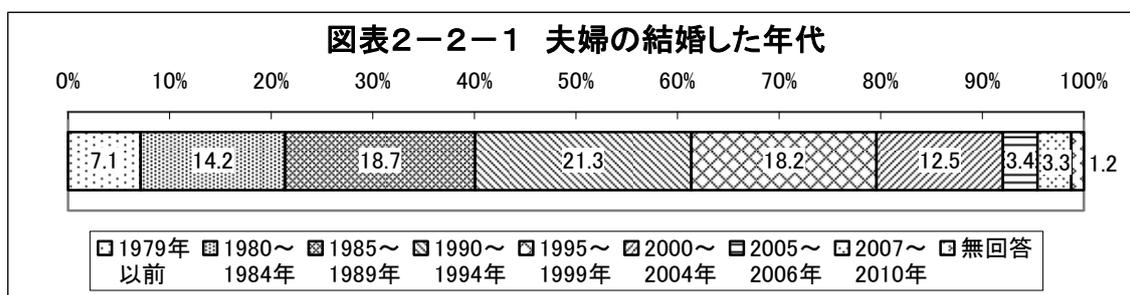
第2節 世帯の状況

結婚した年代（世帯形成時期）、子供の有無とその状況などを中心に、世帯の状況をみておこう²。

1. 結婚した年代

「妻調査」において、夫婦が結婚した年を尋ねた結果を年代に区分してみると、年齢計では1990～1994年が21.3%でもっとも多く、ついで1985～1989年（18.7%）、1995～1999年（18.2%）などとなっている（図表2-2-1）。

妻自身の年齢別にみると、各年齢層において多い年代区分上位3位までではほぼ9割程度以上が入ってしまう結果となっている。この上位3位までの年代範囲をみると、30歳未満では2000年以降、30～34歳は1995～2006年、35～39歳は1990～2004年、40～44歳は1985～1999年、45～49歳は1980～1994年、50～54歳は1989年以前、55～59歳は1984年以前（55～59歳のみは上位2区分で9割超）ということができる（図表2-2-2）³。



図表2-2-2 妻本人の年齢別結婚した年代(多い区分3位まで)

(%)

妻の年齢	1位	2位	3位
30歳未満	2007～2010年 42.1	2000～2004年 30.9	2005～2006年 25.3
30～34歳	2000～2004年 50.9	2005～2006年 17.9	1995～1999年 15.8
35～39歳	1995～1999年 48.9	2000～2004年 30.1	1990～1994年 12.7
40～44歳	1990～1994年 51.7	1995～1999年 30.4	1985～1989年 9.0
45～49歳	1985～1989年 50.7	1990～1994年 27.4	1980～1984年 11.2
50～54歳	1980～1984年 52.1	1985～1989年 27.0	1979年以前 9.9
55～59歳	1979年以前 63.2	1980～1984年 28.4	1985～1989年 4.7
60歳以上	1979年以前 58.5	1980～1984年 18.9	1985～1989年 11.3

² 夫婦の年齢差を計算してみると、平均は1.98歳となっている。また妻の年齢別には、30歳未満が3.10歳、30～49歳の各層は2歳台、50～54歳は1.56歳、55～59歳は0.29歳となっている。それぞれ標準偏差が3～4歳程度ある。

³ なお、なお、「現在の年齢」から「婚姻年数」（2009年－「結婚年」で算出）を差し引いて試算した結婚時の年齢の平均をみると、30歳以上の各年齢層とも26歳台となっている。

2. 二人の「なれそめ」

夫婦の「なれそめ」、出会った契機をみると、年齢計では「職場が同じだった」が31.3%でもっとも多く、次いで「兄弟姉妹、知人・友人の紹介」(17.4%)、「学校が同じだった」(10.9%)などの順となっている。「職場は違うが仕事の関係で知り合った」が7.7%あるので、先の「職場が同じだった」と合わせて4割程度が職場や仕事の関係で出会った二人が結婚しており、職場や仕事結婚に至る出会いの場として重要な契機となっているといえる。年齢別にみると、30歳未満で「学校が同じだった」(23.6%)が他の年齢層に比べ割合が高く、一方で「職場は違うが仕事の関係で知り合った」(2.8%)がかなり少なくなっている。また、45歳以上の年齢層で「親や親戚の紹介」の割合が相対的に高い一方、「趣味の活動を通じて知り合った」などが相対的に低くなっているといったことが指摘できる(図表2-2-3)⁴。

図表2-2-3 夫婦のなれそめ(出会いの契機)

(%)

妻の年齢	幼なじみ	学校が同じだった	職場が同じだった	職場は違うが仕事の関係で知り合った	趣味の活動を通じて知り合った	親や親戚の紹介	学校の恩師や職場の上司からの紹介	兄弟姉妹、知人・友人の紹介	偶然に出会った	その他	無回答
計	0.6	10.9	31.3	7.7	6.9	5.8	1.5	17.4	8.4	8.6	0.9
30歳未満	0.6	23.6	28.7	2.8	6.2	1.1	0.0	17.4	9.6	9.6	0.6
30~34歳	0.9	12.0	28.5	7.3	7.8	0.5	1.4	20.8	11.1	9.0	0.7
35~39歳	0.5	10.7	35.0	6.4	9.5	2.1	0.4	18.4	7.3	8.9	0.8
40~44歳	0.6	9.7	35.7	8.3	7.3	3.9	1.2	16.4	7.9	8.3	0.6
45~49歳	0.2	11.1	28.0	8.4	5.7	8.1	1.7	18.2	9.2	8.5	1.1
50~54歳	0.7	10.3	27.9	7.7	6.0	10.6	3.2	16.7	7.4	8.7	0.9
55~59歳	1.3	10.5	31.8	8.7	4.7	10.3	0.8	15.3	7.9	7.6	1.1
60歳以上	0.0	3.8	35.8	9.4	9.4	1.9	0.0	9.4	18.9	7.5	3.8

3. 子どもの状況

(1) 年齢・学齢別子どもの有無

夫婦の子どもの有無をみてみよう。ただし、「夫調査」で調査していることから「妻調査」では子ども全体について調査しなかったため、「統合データ」でみた結果である。年齢計でみて、「中学生以下の子どもはいない(他の年齢層も含めて子どもはいない場合を含む)」夫婦が40.4%であり、これに「無回答」(3.7%)を考慮して55.9%の夫婦に子どもがいることとなっている。子どもの年齢・学齢別に有無をみると(複数回答)、小学生がいる夫婦が32.0%、中学生が22.4%、3歳以上の就学前が14.8%であり、3歳未満の乳幼児がいる夫婦は10.6%となっている(図表2-2-4)。

(2) 保育園児の有無とその送迎をする人

「妻調査」では、特定の時期の子どもについて尋ねている。一つが保育園児の有無とその送迎を担っている人である。保育園児のいる割合をみると、妻自身の年齢計で6.3%となっ

⁴ これらの事項については、今回の調査の回答者の状況を確認したものであるという意味合いが強く、参考にはなるとしても、広く我が国全般に一般化できるかどうかは慎重に判断されるべきである。

図表2-2-4 年齢・学齢別子どもの有無(重複回答)

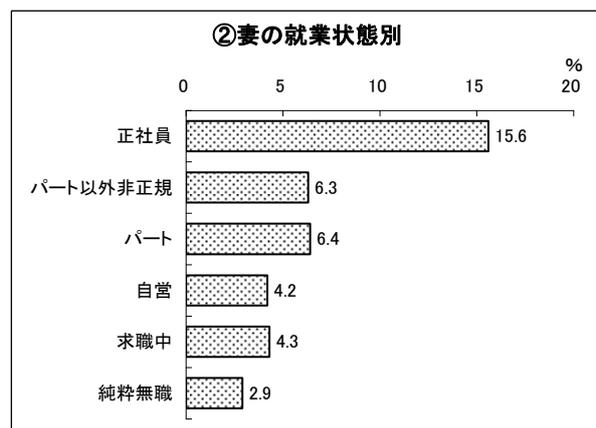
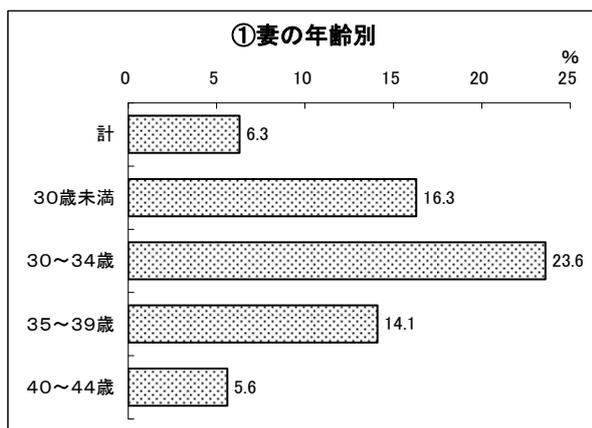
(%)

妻の年齢	計	3歳未満	3歳以上、 小学校就学 前	小学生	中学生	中学生以下 の子供はい ない(子供 いない含 む)	無回答
計	100.0	10.6	14.8	32.0	22.4	40.4	3.7
30歳未満	100.0	57.4	33.0	10.2	0.6	18.8	3.4
30～34歳	100.0	48.3	43.8	29.8	1.0	16.1	0.7
35～39歳	100.0	19.9	36.9	59.3	17.2	12.5	0.4
40～44歳	100.0	3.9	13.8	59.4	47.9	14.9	1.4
45～49歳	100.0	0.2	1.9	22.5	31.2	50.6	3.9
50～54歳	100.0	0.8	0.8	3.6	9.0	79.7	7.8
55～59歳	100.0	0.5	0.5	0.3	0.8	87.9	10.2
60歳以上	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	88.2	11.8

(注) 本体調査と妻調査との統合データ(有効回答者数4,945×2人)による。

ている。妻自身の年齢別には30～34歳で23.6%ともっとも高く、次いで30歳未満(16.3%)、35～39歳(14.1%)でそれぞれ10%台半ばであり、40～44歳では5.6%となっている(図表2-2-5①)⁵。また、雇用・就業形態別にみると、「正社員」のうち15.6%に保育園児がおり、次いで「パート」(6.4%)、「パート以外の非正規雇用者」(6.3%)などとなっている(図表2-2-5②)。逆に、保育園児のいる妻の雇用・就業形態の分布をみると、「パート」が36.8%ともっとも多く、次いで「純粋無職」が26.9%と多くなっており、「正社員」は12.9%にとどまっている。

図表2-2-5 保育園児のいる割合



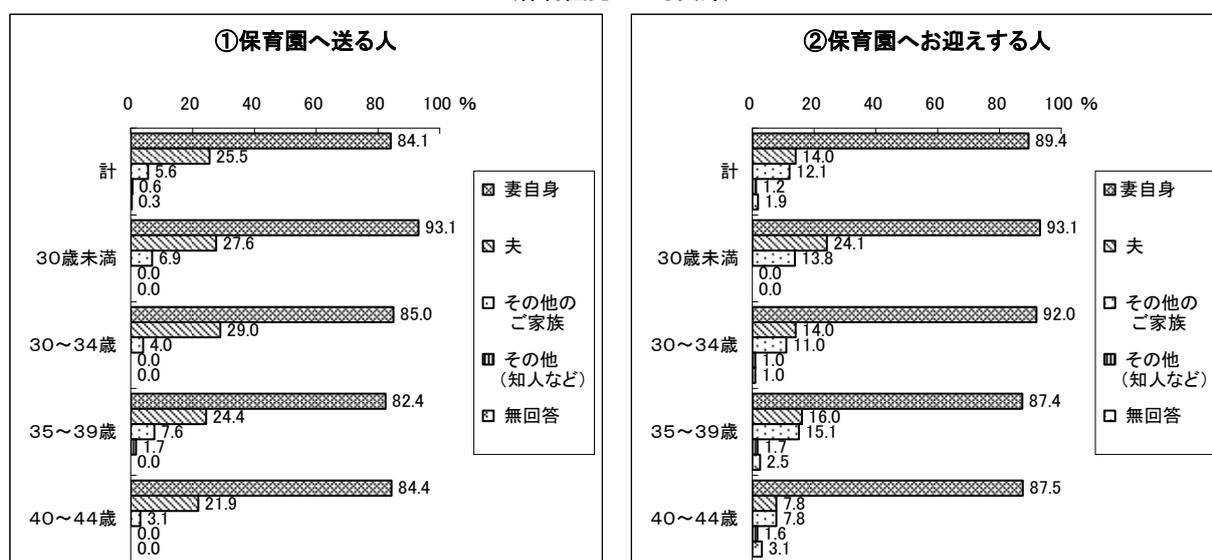
(保育園への送迎をする人)

保育園児がいる妻にその送迎の担当者を尋ねた結果をみると(複数回答)、年齢計では、「送り」は「妻自身」が84.1%となっているものの、「夫」も25.5と4分の1程度挙げられている

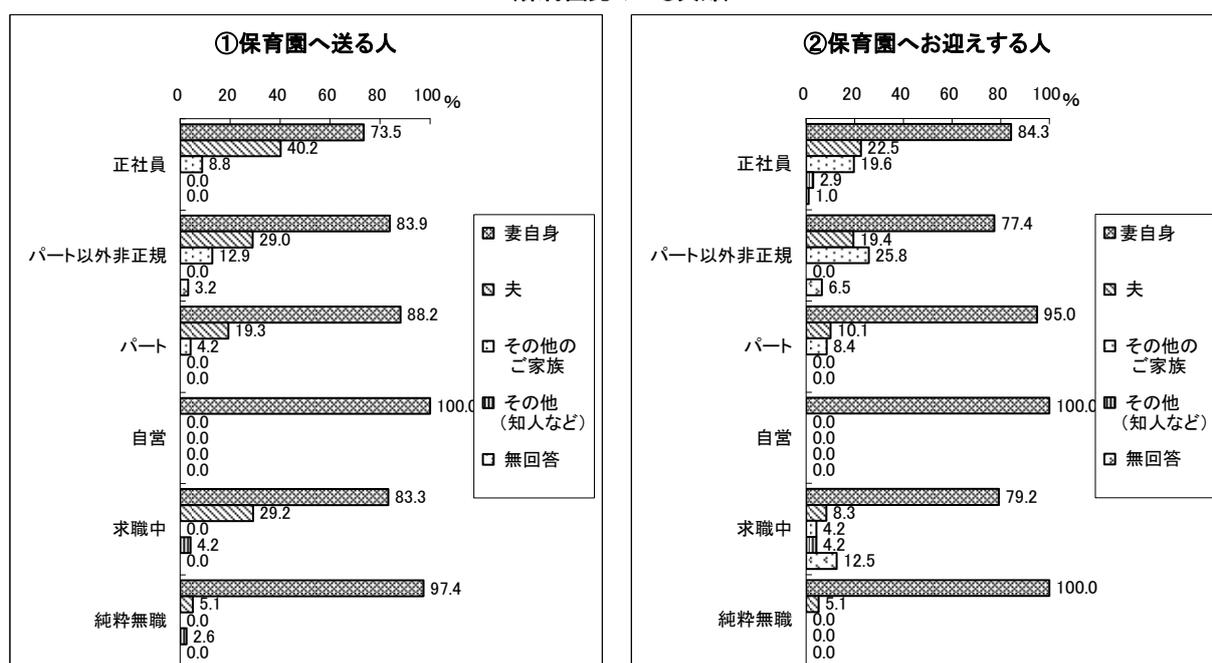
⁵ 45歳以上の各年齢層では、保育園児のいる割合が1%未満あるいはまったくいない結果となっている。

のに対して、「お迎え」については「妻自身」が89.4%となり「夫」は14.0%にとどまっている。また、「その他の家族」（大部分夫婦いずれかの親であると考えられる）が「送り」では5.6%であるのに対して「お迎え」では12.1%にまでなっている。「送り」までは可能な夫も「お迎え」を請け負うことは困難な場合が多く、その分妻自身や夫婦の親たちの手助けを得ている姿が窺われる。妻自身の年齢別にみると、こうした特徴に大きな変化はないが、夫が「送り」をする割合と「お迎え」をする割合の差について、30歳未満ではさほど大きなものではないが、30歳以上の各年齢層ではかなりの差となっていることが注目される（図表2-2-6）。

図表2-2-6 保育園の送迎をする人(妻の年齢別)(複数回答)
(保育園児のいる夫婦)



図表2-2-7 保育園の送迎をする人(妻の就業状況別)(複数回答)
(保育園児のいる夫婦)



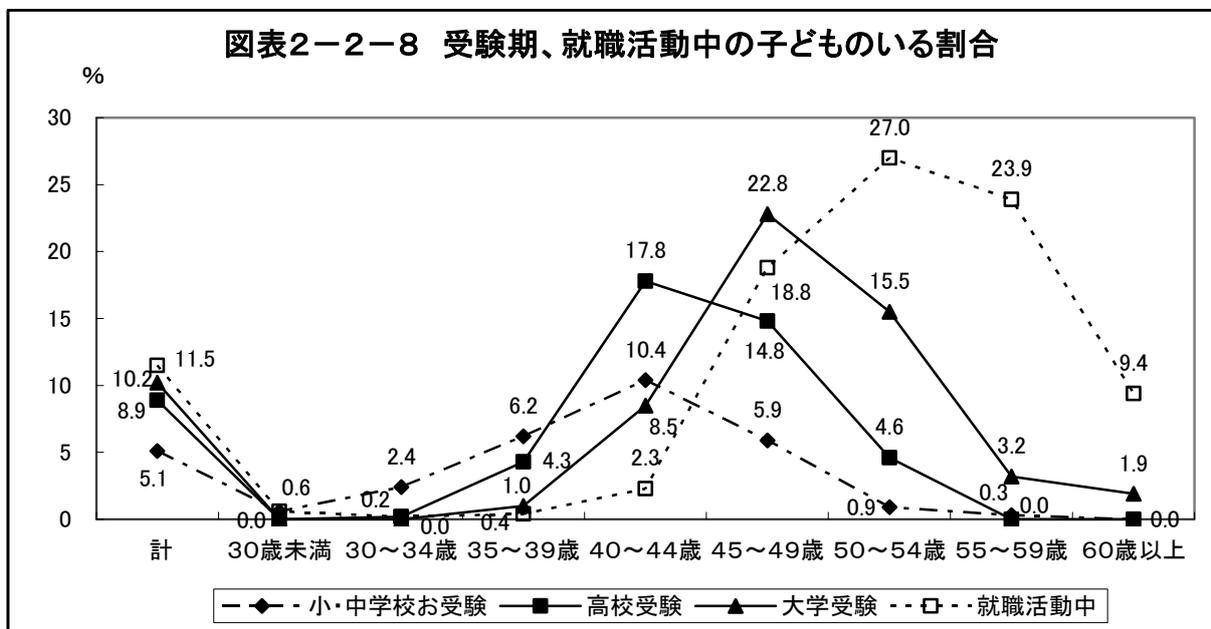
また、妻自身の雇用・就業形態別にみると、妻が正社員の場合は、妻自身が「送り」をしている割合が73.5%、「お迎え」をする割合が84.3%と他の雇用・就業形態である場合よりも相対的に低い傾向があり、代わって夫が送迎（「送り」：40.2%、「お迎え」：22.5%）する割合が相対的に高くなっている（図表2-2-7）。

妻自身が「送り」をする割合は、妻が正社員の場合がもっとも低くなっており、「パート以外非正規」（83.9%）、「パート」（88.2%）となるに従い高くなっている。また、妻が無職でも「求職中」である場合は83.3%と「パート」の場合を下回り、「パート以外非正規」の場合と同程度となっている。一方、「お迎え」をする割合をみると、「送り」の場合と同様の傾向がみられるが、その中で、妻が「パート以外非正規」の場合（77.4%）、正社員の場合よりも低くなっている。これは、「その他の家族」が代わって「お迎え」を担っていることが大きな背景となっている⁶。

こうした結果をみると、保育園児のいる場合に送迎を担う人がほかにいるかどうかと、妻がどのような形態で就業するかとは、因果関係の方向は区々であろうが、関連していることが窺われる。もとより、正社員や「パート以外非正規」などの働き方が、妻自身によって保育園への送迎が可能となるものであるかどうか大きな要因であることはいままでのない。

（3）受験期にある子どもの有無

「妻調査」で調査した特定の時期の子どもの状況のもう一つが、受験期あるいは就職活動中



⁶ これは、今回の調査ではこのようになっていることを示しているだけで、一般的に妻が「パート以外非正規」で就業している場合には「その他の家族」が保育園への「お迎え」をしていることが多いということを主張しようとするものではない。

の子どもの有無である。年齢計でみると、「小・中学校お受験」の子どもがいる夫婦は5.1%、「高校受験」は8.9%、「大学受験」は10.2%、「就職活動中」は11.5%となっている。

受験期あるいは就職活動中かどうかは子どもの年齢と直接的に関連し、したがって間接的に妻自身の年齢と関連するものと考えられる。妻自身の年齢別にみると、「小・中学校お受験」と「高校受験」の割合は40～44歳、「大学受験」は45～49歳、「就職活動中」は50～54歳がそれぞれ他の年齢層よりも高くなっており、年齢別のプロファイルで描けば、これらの年齢層をピークとする山型が描かれる（図表2-2-8）。

こうした「イベント」（＝生涯画期事象）に直面した子どものいる世帯では、他の事情が同じであっても陰に陽に様々な影響が生じる可能性があることには留意する必要がある。

第3節 夫の仕事をめぐる生活時間の状況

「妻調査」により妻からみた夫の仕事をめぐる生活時間の状況をみておこう。調査設計上、夫はすべて正社員として就業している人たちである。まず、夫の職業、役職、年収などの就業をめぐる状況をみた上で、夫の生活時間、勤務の状況、夫の仕事時間の長さに対する妻自身の希望などをみていきたい。

1. 夫の就業をめぐる状況

（1）夫の職業（仕事の内容）

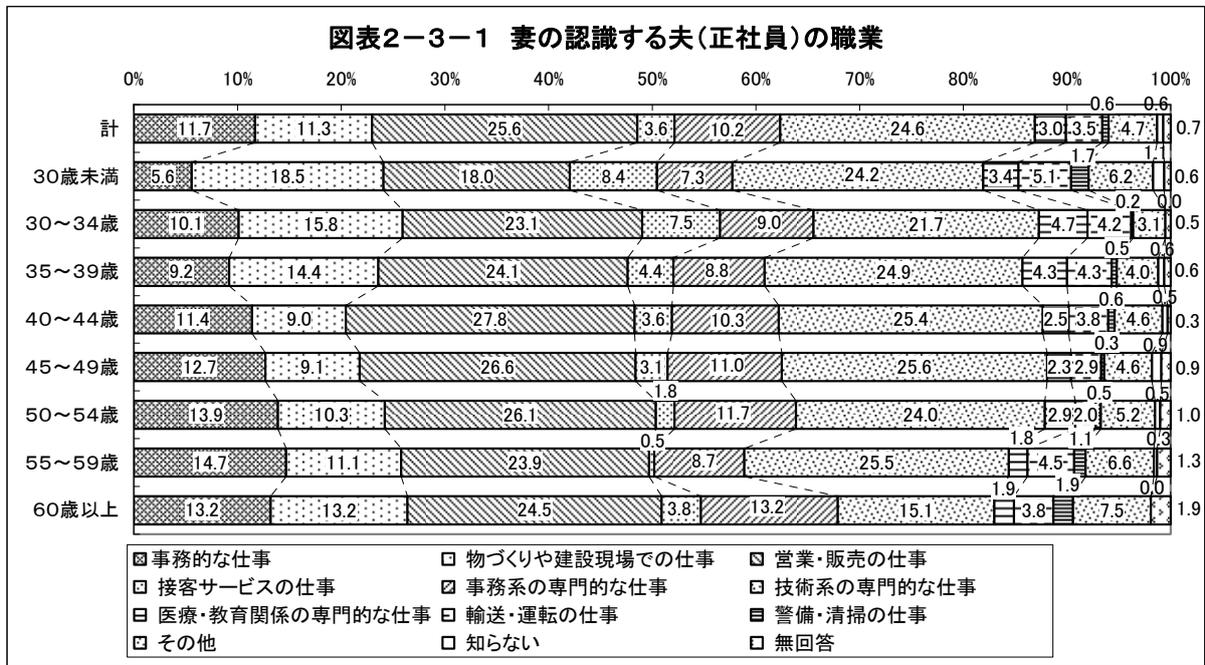
妻の認識している夫の職業をみると、年齢計では「営業・販売の仕事」（25.6%）と「技術系の専門的な仕事」（24.6%）がそれぞれ4分の1ずつを占めて多く、次いで「事務的な仕事」（11.7%）、「物づくりや建設現場の仕事」（11.3%）及び「事務系の専門的な仕事」（10.2%）がそれぞれ10%強を占め、これ以外の「接客サービス」、「輸送・運転」、「医療・教育関係の専門的」といった仕事がそれぞれ3%程度となっている⁷。

妻の年齢別にみると、「事務的な仕事」が30歳未満の5.6%から55～59歳の14.7%へ年齢が高くなるほどほぼ緩やかに上昇していること、「事務系の専門的な仕事」も50歳台後半で低くなるのを除けばほぼ同様に年齢が高くなるほど割合が高くなる傾向がみられること、「物づくりや建設の現場での仕事」の割合は、30歳台までが比較的高く（10%台半ば～後半）40歳台になると低くなる（9%程度）が50歳台ではやや高まる（10%強）こと、などといった特徴がみられている（図表2-3-1）。

「妻調査」と「夫調査」とを統合した「統合データ」により、妻の認識する夫の職業と「夫調査」における夫の回答とをクロスさせた結果、次の参考表のような結果となった。「妻調査」と「夫調査」で選択肢ないしその表現が異なる部分があるので留意が必要であるが、妻の認識する夫の職業と夫の回答とが概ね8～9割方一致していることは当然であるとして、妻の

⁷ 一部の職業で調査票上の表記を省略しており、「事務的な仕事」は調査票上「総務・人事・経理などの事務的な仕事」、「物づくりや建設現場での仕事」は「製造現場での物づくりや建設現場での仕事」となっている。

認識する職業が「営業・販売の仕事」や「輸送・運転の仕事」では一致度が高く、「技術系の専門的な仕事」や「事務系の専門的な仕事」、「接客サービス」、「医療・教育関係の専門的な仕事」などでは相対的に一致度が低くなっている。これらは、例えば「夫調査」では「営業・販売」となっていることなどが多い。



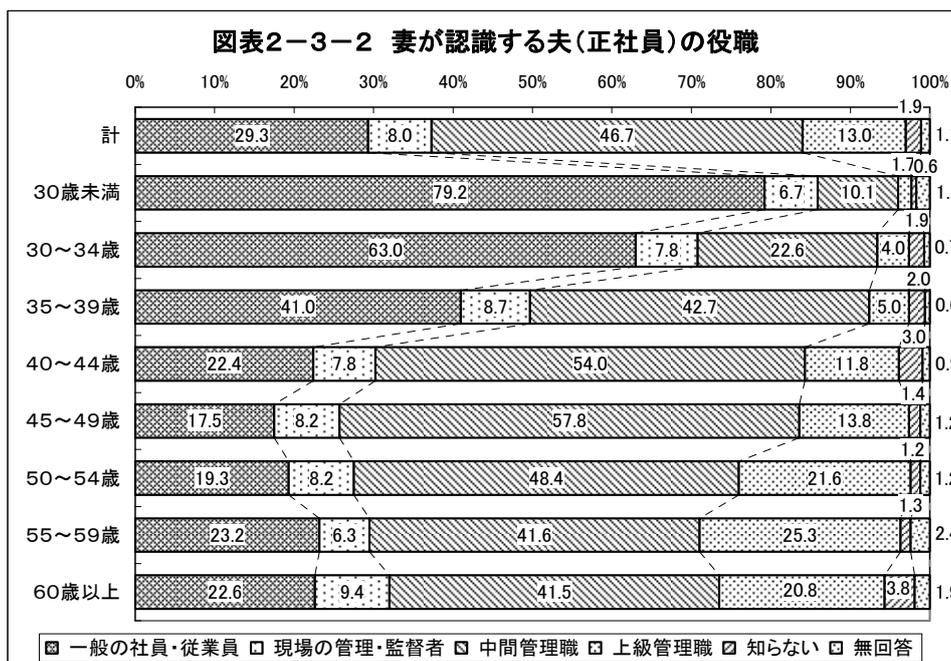
(参考)妻調査による夫の職業と本人調査における職業の比較(統合データ)

妻調査における夫の職業	夫調査による職業のベスト1・2	
	1位	2位
総務・人事・経理などの事務的な仕事	総務・人事・経理等 74.9%	一般事務・受付・秘書 8.7%
製造現場での物づくりや建設現場での仕事	製造・建設の作業 60.6%	現場管理・監督 29.9%
営業・販売の仕事	営業・販売 93.4%	現場管理・監督 2.1%
接客サービスの仕事	接客サービス 65.5%	現場管理・監督 10.9%
事務系の専門的な仕事	一般事務・受付・秘書 24.5%	調査分析・特許法務などの事務系専門職 20.9%
技術系の専門的な仕事	研究開発・設計・SEなどの技術系専門職 67.1%	現場管理・監督 13.0%
医療・教育関係の専門的な仕事	医療・教育関係の専門職 76.7%	その他 6.0%
輸送・運転の仕事	輸送・運転 91.9%	現場管理・監督 6.4%
警備・清掃の仕事	警備・清掃 66.7%	現場管理・監督 11.1%
その他	その他 43.2%	現場管理・監督 26.1%
知らない	研究開発・設計・SEなどの技術系専門職 21.4%	営業・販売 21.4%

(注)「事務系の専門的な仕事」の第3位は、「総務・人事・経理等」で11.0%である。

(2) 夫の役職

妻の認識する夫の役職(調査票上は「会社での立場」)をみると、「中間管理職」が46.7%と最も多く、次いで「一般の社員・従業員」が29.3%、「上級管理職」13.0%、「現場の管理・監督者」8.0%などとなっている。妻の年齢別には、年齢が高くなるほど「一般の社員・従業員」の割合が30歳未満の79.2%から45～49歳の17.5%まで低下し、「中間管理職」や「上級管理職」の割合が高くなっている。一方、50歳台に入ると「一般の社員・従業員」の割合が上昇し「中間管理職」の割合が低下している。「上級管理職」の割合は、50歳台に入っても上昇している(図表2-3-2)。



前項同様夫の役職についても、「統合データ」から妻の認識と夫の回答とを比較した。ただし、「妻調査」では、上述のように「一般」、「中間」、「上級」の管理職といった問としており、一方「夫調査」では「課長クラス」、「部長クラス」といった役職クラスを尋ねている。比較した結果をみると、例えば妻が「一般の社員・従業員」とし回答している場合であっても夫は「一般社員」としている割合が70.3%であり、「係長・主任クラス」とする割合が21.7%などとなっている。常識的に対応するものとして、次の参考表において薄く着色したセルを想定すると、「一般の社員・従業員」で70.3%、「現場の管理・監督者」で47.3%、「中間管理職」で46.7%、「上級管理職」で81.7%が対応している。同じ「課長」や「部長」という役職であっても「中間」か「上級」かの判断は、場合により、あるいは受け取る人の感性によって異なることが考えられるので何ともいえない面があるが、前項の職業より一致度が総じてやや低いといえそうである。

(参考)妻調査による夫の役職と本人調査における役職の比較(統合データ)

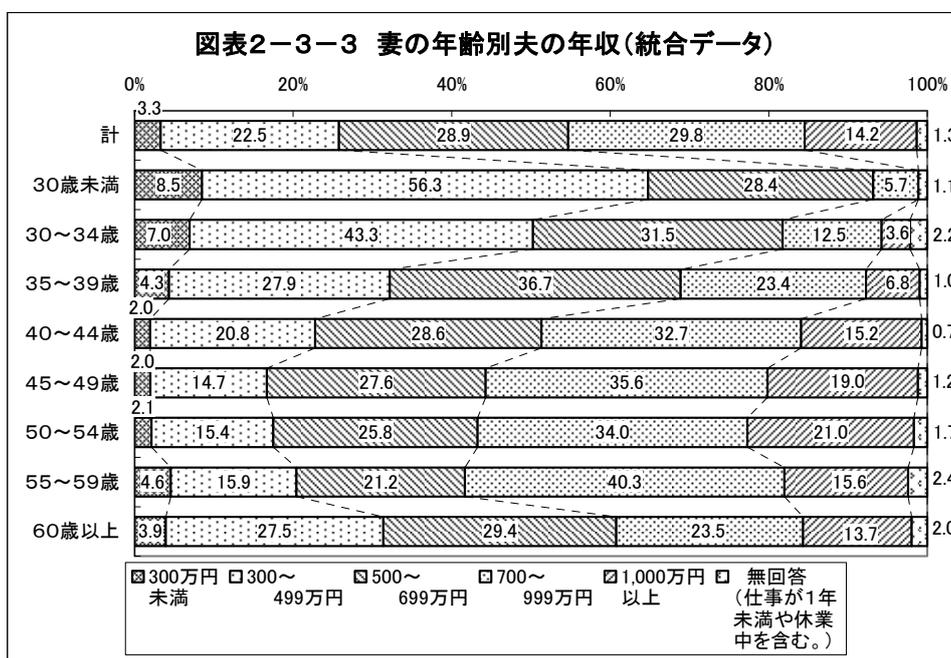
夫調査→ ↓妻調査	一般社員	係長・主任 クラス	課長代理ク ラス	課長クラス	部長クラス	支社長・事 業部長ク ラス	役員クラス	無回答	合計
一般の社員・従業員	70.3	21.7	3.9	2.0	0.7	0.2	0.2	1.0	100.0
現場の管理・監督者	13.3	38.0	9.3	20.8	12.8	3.0	1.3	1.8	100.0
中間管理職	2.0	18.7	12.3	46.7	16.6	1.3	0.7	1.7	100.0
上級管理職	0.5	1.3	1.4	10.6	49.7	13.3	20.7	2.4	100.0
知らない	17.2	33.3	9.7	25.8	9.7	2.2	2.2	0.0	100.0
無回答	18.5	16.7	18.5	20.4	13.0	1.9	3.7	7.4	100.0
合計	23.6	19.2	8.2	26.1	15.6	2.6	3.2	1.6	100.0

(3) 夫の年収

夫の年収(税込み)は「妻調査」の調査項目としていないので、「統合データ」の「夫調査」による結果データでみると、799～999万円が29.8%と最も多く、500～699万円が

28.9%と同程度あり、次いで 300～499 万円（22.5%）、1,000 万円以上（14.2%）の順になっている。妻の年齢別でみると、年齢が高くなるにつれて年収の高い層の割合が高くなっていく。しかし 50 歳台になると、500 万円未満の層の割合が 5 歳若い年齢層に比べやや高くなる一方で 500～699 万円層は低くなるなど傾向に変化がみられている（図表 2-3-3）。

年収は役職と関係していることが考えられる。そこで、階級別に回答された年収を階級値（原則として各階層の中間値）に変換した上で役職別に平均年収を試算してみると、次の参考表のようになった。役職が高いほど年収も高いことが確認される⁸。また、「夫調査」での役職と「妻調査」での役職とで平均年収を比べてみると、先に想定した対応関係でみると、「一般の社員・従業員」では「妻調査」の方がやや平均年収が高いのに対して、「現場の管理・



(注) 本体調査と妻調査との統合データによる。

(参考) 役職別夫の平均年収(階級値による)

		(万円)			
「夫調査」の役職	平均値	標準偏差	「妻調査」の役職	平均値	標準偏差
一般社員	500	191.7	一般の社員・従業員	533	210.1
係長・主任クラス	623	211.5	現場の管理・監督者	619	258.8
課長代理クラス	762	271.8	中間管理職	782	279.2
課長クラス	815	279.0	上級管理職	948	380.5
部長クラス	897	344.8	知らない	785	371.7
支社長・事業部長クラス	983	405.1	無回答	740	220.6
役員クラス	820	418.2	合計	715	309.5
無回答	703	287.3			
合計	715	309.5			

(注) 階級値の設定に当たっては、図表 2-3-3 の標準ではなく、調査票上の年収階級を用いた。
 なお、下限の「100万円未満」は75万円、上限の「2,000万円以上」は2,500万円を階級値とした。

⁸ ただし、「夫調査」の「部長クラス」や「支社長・事業部長クラス」と「役員クラス」とでは逆転している。これは、企業規模の違いを背景としていられる。

監督者」や「中間管理職」ではやや低く、「上級管理職」ではほどほどの対応関係になっている⁹。

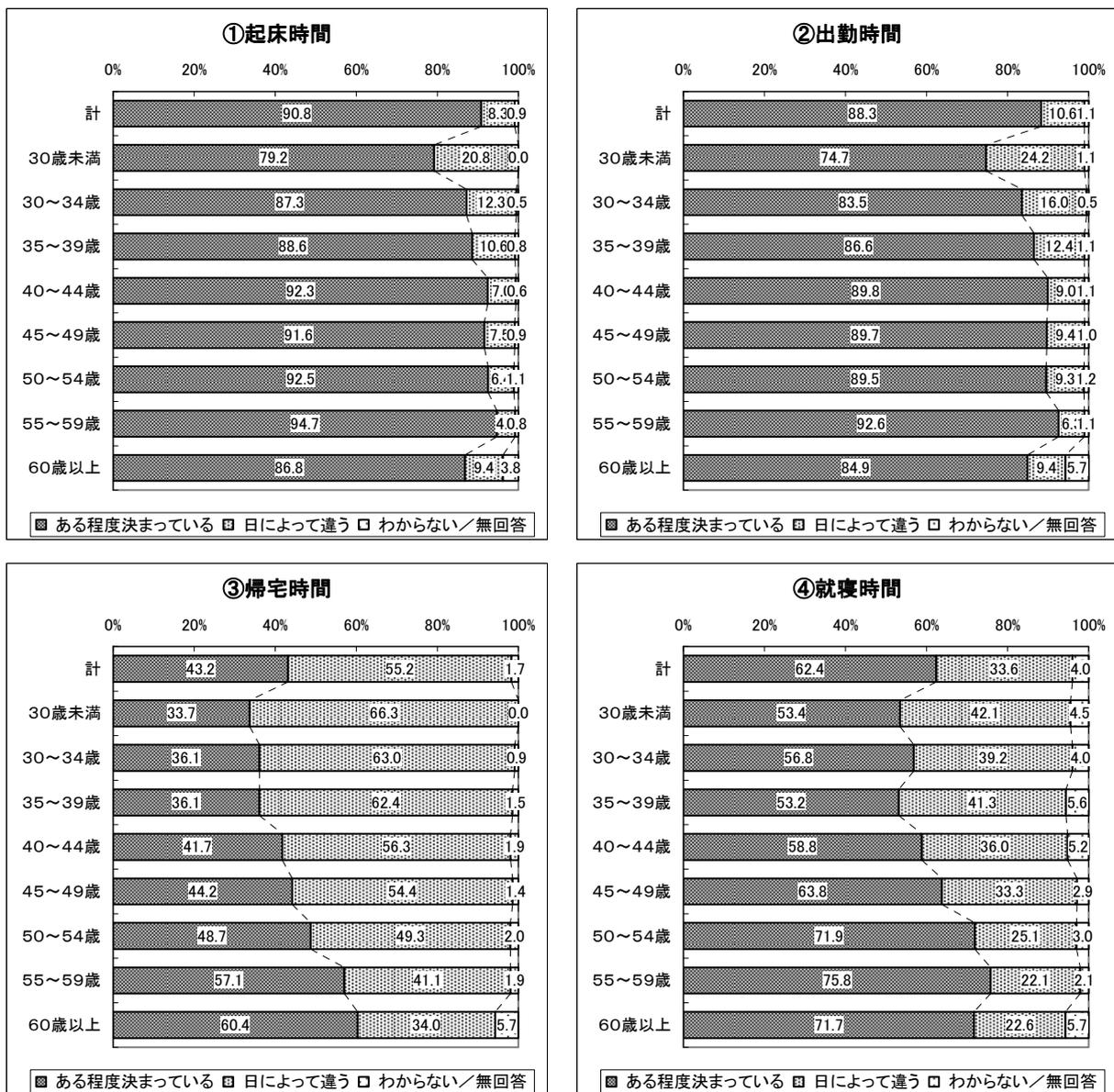
2. 夫の生活時間の状況

夫の生活時間を、普段勤務のある日における起床時間（時刻）、出勤時間（時刻）、帰宅時間（時刻）及び就寝時間（時刻）の4つのポイントで尋ねた結果をみておこう。

（1）夫の生活時間の規則性

夫の生活時間がある程度決まっているかどうか（以下「規則性の有無」と表現する）を尋

図表2-3-4 普段の日(出勤する日)の夫の生活時間(妻調査)



⁹ なお、データは示さないが、「夫調査」の役職ごとに「妻調査」での役職別の平均年収を計算してみると、「夫調査で同じ役職内で「妻調査」の役職が高くなれば平均年収も高くなっている。妻による夫の役職判断には、収入の多寡も一つの判断要素になっていることが窺われる。

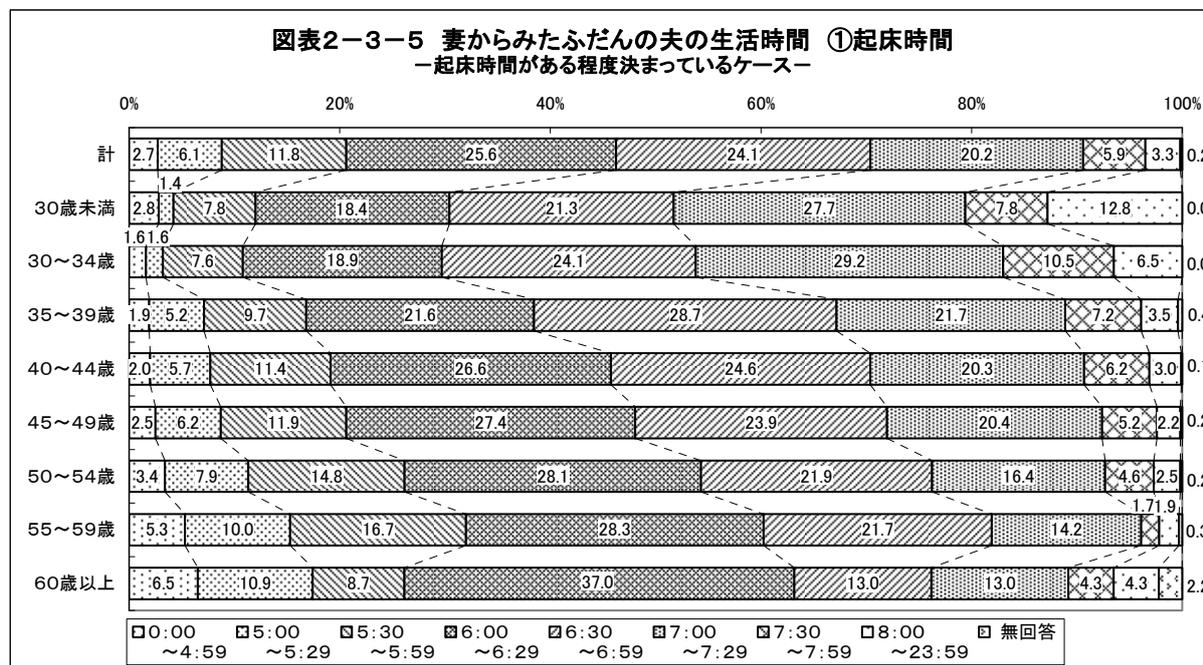
ねた結果をみると、起床時間と出勤時間（家を出る時刻）については9割程度（それぞれ90.8%、88.3%）の妻が規則性ありと回答しているのに対して、帰宅時間では4割強（43.2%）、就寝時間では6割強（62.4%）にとどまっている。妻の年齢別にみると、年齢が高くなるほど規則性がある割合が高くなっている（図表2-3-4）。

（2）夫の生活時間（規則性のある場合）

夫の生活時間に規則性がある場合に、それぞれの時刻を尋ねた結果をみておこう。

（起床時間）

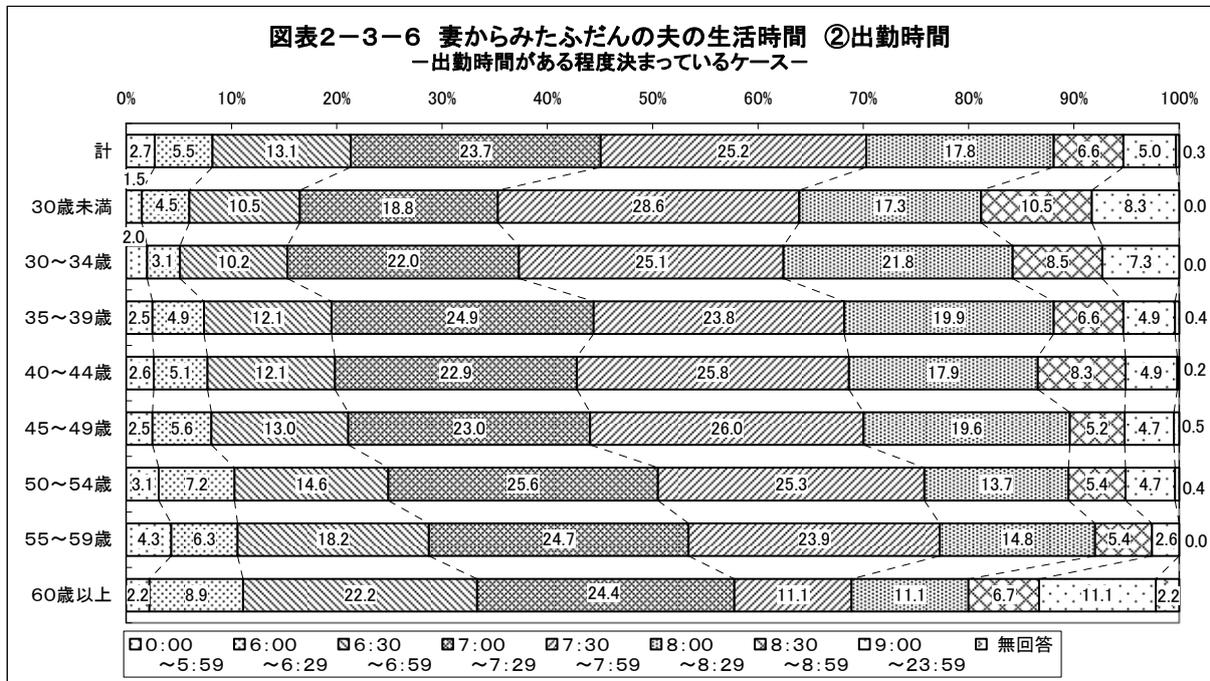
起床時間については、妻の年齢計で「6:00～6:29」が25.6%、「6:30～6:59」が24.1%と午前6時台に起床する夫が半数程度となっており、それより前の起床が2割程度、それより後の7時以降の起床が3割程度となっている。妻の年齢別にみると、30歳未満や30～34歳で午前7時台前半に起床する夫が3割程度ともっとも多くなっているが、30歳台後半には2割程度と割合が低くなり、さらに50歳台には10%台半ばになっている。午前6時台に起床する夫の割合は、30～34歳までは4割程度であるが35歳以降には各年齢層とも半数程度で推移している。これらの一方、午前6時前に起床する夫の割合は、30歳未満や30～34歳では10%をやや上回る水準であるが、35歳以降年齢が高くなるほど高くなり、55～59歳では3割強（32.0%）までになっている（図表2-3-5）。



（出勤時間）

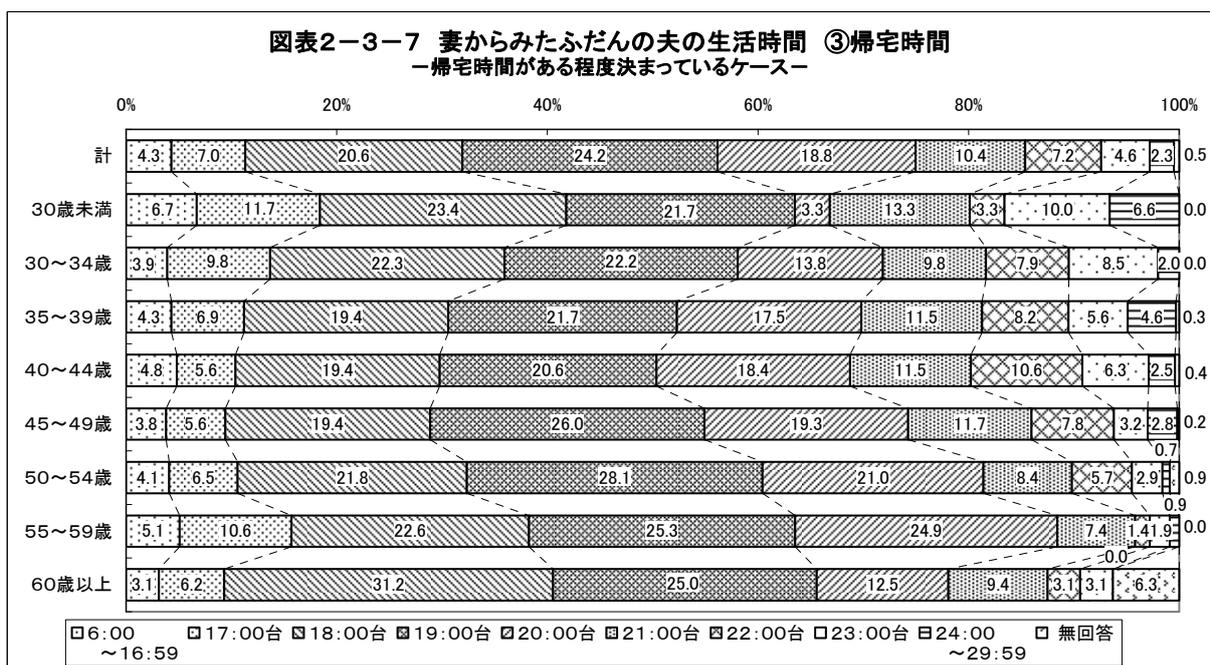
出勤時間に規則性のある夫についてその時刻をみると、「7:30～7:59」が25.2%でもっとも多く、次いで割合の高い「7:00～7:29」の23.7%と合わせて午前7時台に出勤する割合が48.9%、半数弱を占めている。午前7時より前に出勤する夫が2割強（21.3%）、午前8時以

降の出勤が3割弱（29.4%）となっている。上の起床時間と併せ多くの夫が起床後1時間程度で出勤していることが窺われる。妻の年齢別に夫の出勤時間をみると、起床時間と同様に加齢とともに早い時間に出勤する割合が高くなり、遅い時間の割合が小さくなる傾向がみられる（図表2-3-6）。



(帰宅時間)

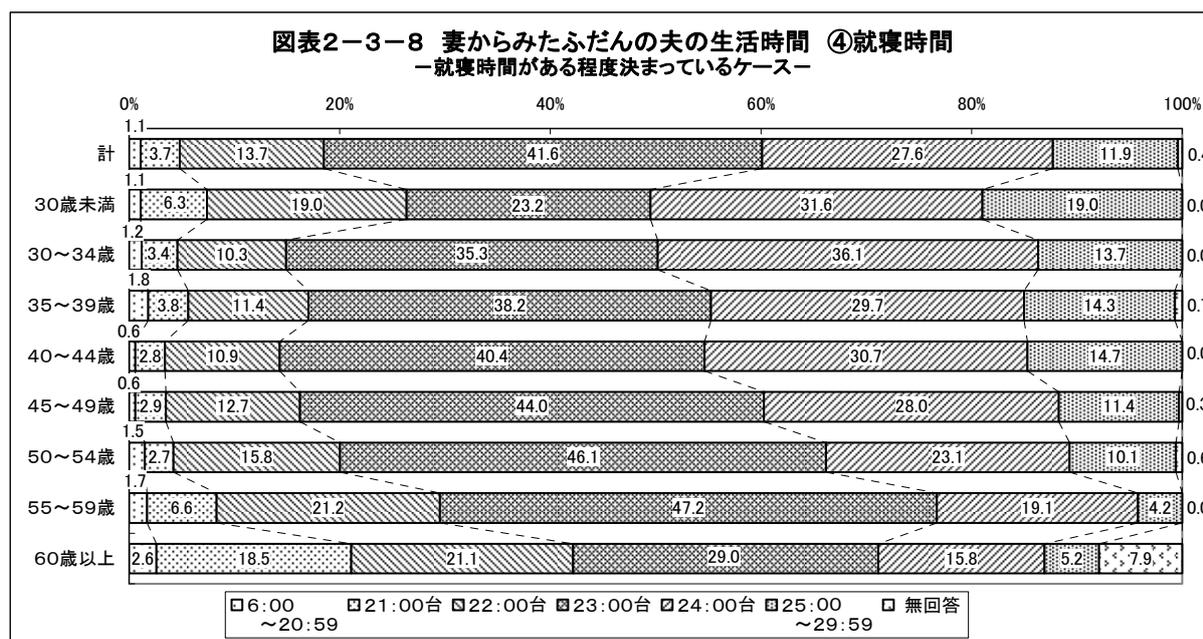
勤務からの帰宅時間に規則性のある夫は4割程度であることを念頭におきつつ、規則性のある夫の帰宅時間をみると、「19:00台」が24.2%でもっとも多く、次いで「18:00台」20.6%、



「20:00 時台」18.8%となっている。午後6時より前の帰宅が1割強（11.3%）、午後9時以降が2割台半ば（24.5%）となっている。その中で、勤務状態を問わずに言えば、毎日のように（規則性をもって）午後11時以降に帰宅する夫が6.9%（全体に占める割合に直せば3%程度）もいることは注目されてよい。妻の年齢別に夫の帰宅時間をみると、40歳台くらいまでは年齢の上昇とともに早い時間に帰宅する割合が小さくなり、より遅い時間に帰宅する割合が大きくなっていくが、50歳台になるとこの傾向が逆転している（図表2-3-7）。

（就寝時間）

就寝時間に規則性のある夫は6割程度であることを念頭におきつつ、規則性のある夫の就寝時間をみると、「23:00 台」が41.6%と最も多く、次いで「24:00 台」（翌日の午前0時以降同1時前まで）が27.6%となり、この時間帯で全体のほぼ7割を占めている。これより早い時間に就寝するのは2割弱、より遅い時間に就寝するのは1割強となっている。妻の年齢別に夫の就寝時間をみると、年齢の上昇とともにより早い時間に就寝する割合が大きくなっている（図表2-3-8）。



以上の結果をまとめてみれば、勤務のある日の夫は出勤時間のおおよそ1時間くらい前に起床し、それぞれに応じて午後7時から10時前までを中心にややばらけた時間帯に勤務から帰宅するものの、概ね深夜0時を挟んだ2時間の時間帯に就寝する人が多いということがいえる。ある意味で当然のことであるが、勤務のある日の夫の生活時間は、仕事の必要を中心に設定されていることが窺われる。これは生活時間にほぼ規則性のある夫についての妻の認識であるが、規則性のない場合においても、種々の例外はあるであろうがこのことに基本的な変わりはないものと考えられる。

3. 夫の勤務状況（経常的でない仕事）

生活時間の視点から、夫の勤務状況を妻に尋ねた結果をみてみよう。まず、夫の週休日を確認したうえで、夫婦（家庭）の生活時間に影響を与えるような夫の経常的でない仕事と仕事に関連した行動などの状況をみる。

（1）夫の週休日

夫の週休日をみると、日曜日が85.8%であり、次いで土曜日が70.4%となっている。土日以外の曜日はそれぞれ0.5~2.2%のごく小さな割合となっている。一方、「曜日では決まっていない」が10.2%となっており、土日を週休日としている場合以外では、曜日で決めるのではなく例えばシフト制などでその都度決められていることが窺われる。妻の年齢別にみると、年齢が高い層ほど土日が週休日である割合が大きくなり、「曜日できまっていない」とする割合が小さくなる傾向がみられている¹⁰。

図表2-3-9 夫の週休日

（複数回答、%）

	計	土曜日	日曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	曜日では決まっていない	無回答
計	100.0	70.4	85.8	1.2	1.3	2.2	0.6	0.5	10.2	0.4
30歳未満	100.0	53.9	68.0	1.7	1.7	1.7	1.1	1.1	26.4	0.0
30~34歳	100.0	62.7	80.9	0.5	1.7	2.8	0.9	0.7	14.9	0.0
35~39歳	100.0	66.9	84.5	2.0	1.9	2.1	0.8	0.4	11.3	0.2
40~44歳	100.0	72.4	87.0	0.9	1.6	2.2	0.3	0.4	8.8	0.3
45~49歳	100.0	71.8	87.5	1.4	1.0	2.6	0.6	0.4	8.6	0.4
50~54歳	100.0	74.9	88.4	1.1	0.9	1.9	0.5	0.4	8.3	0.5
55~59歳	100.0	73.9	89.7	0.5	1.3	1.8	0.0	0.3	7.4	0.8
60歳以上	100.0	64.2	77.4	0.0	0.0	1.9	0.0	1.9	15.1	3.8

（2）夫の経常的でない仕事

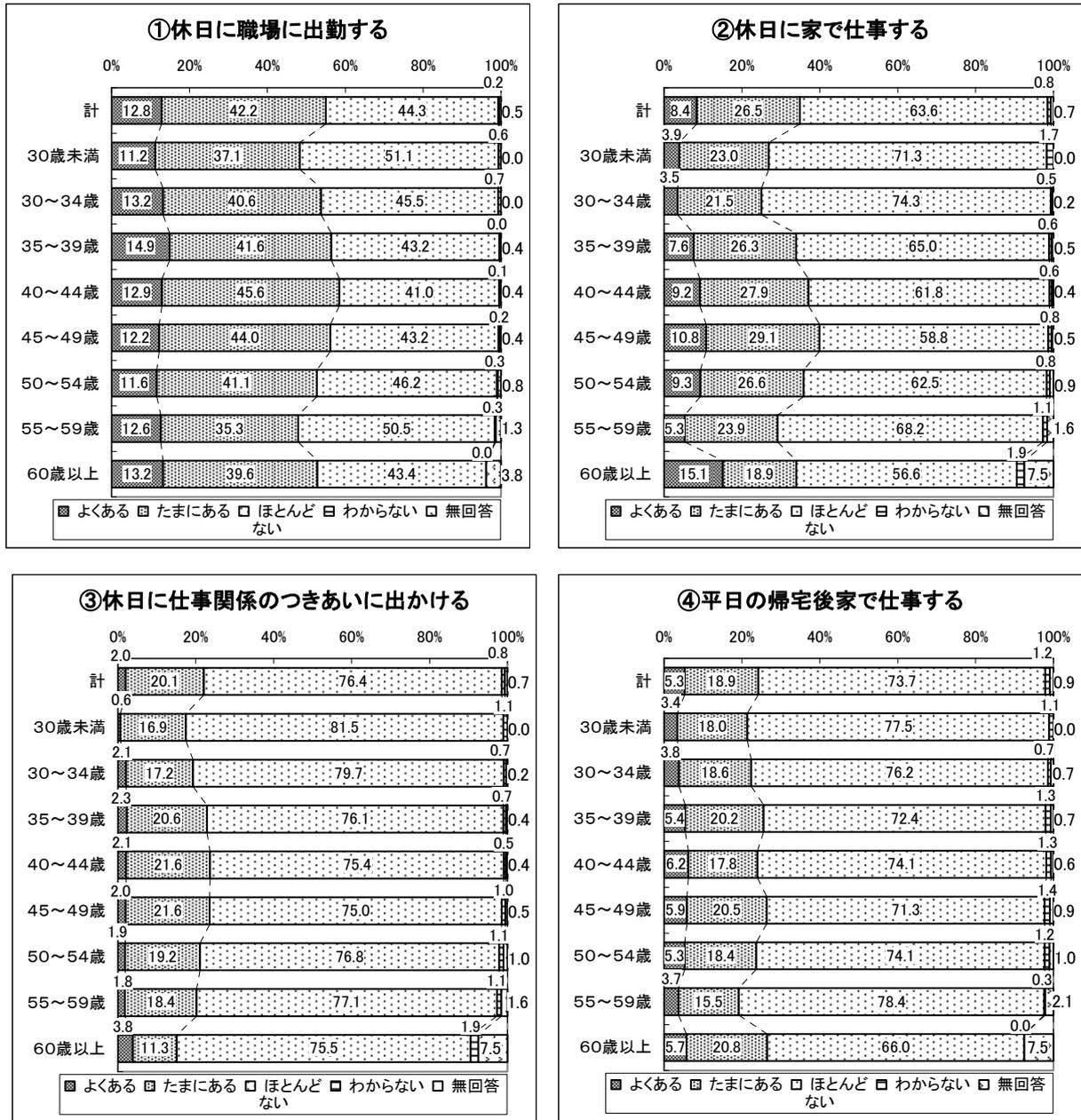
妻に夫が経常的でない仕事をするのがどのくらいあるかを尋ねた結果をみてみよう。

（休日出勤）

「休日出勤」は、「よくある」が12.8%、「たまにある」が42.2%となっており、両者合わせて55.0%、半数超の夫が休日に職場に出勤することがある。妻の年齢別には、「よくある」と「たまにある」との合計の割合でみて、40歳台前半層（58.5%）がもっとも高くなっており、それまでの若い層では年齢が上昇するにつれ休日出勤をする割合は徐々に大きくなり、それを越えた年齢層では逆に徐々に小さくなっている。なお、「よくある」だけをみると、30歳台後半層（14.9%）で割合がもっとも大きくなっている（図表2-3-10①）。

¹⁰ 一般に土日以外が週休日となるのは、商業や流通、サービス業関係の産業で多く、その中でも現場で就業する機会が多いと考えられる。したがって、年齢が高い層ほど土日休日が多くなっていることは、この間の産業構造第三次化・サービス化の進展や年齢が高い層ほど管理職に就いて現業から離れている場合が多いことなどの要因が考えられるが、ここではこれ以上の分析はしないでおく。

図表2-3-10 妻からみた夫の勤務の状況



（「休日の在宅勤務」¹¹）

「休日の在宅勤務」（「休日に家で仕事する」こと）をみると、「よくある」が8.4%、「たまにある」が26.5%となっており、両者合わせて34.9%の夫が休日に家で仕事をすることがある。妻の年齢別には、「よくある」と「たまにある」との合計の割合でみて、40歳台後半層（39.9%）がもっとも高くなっており、それまでの若い層ではおしなべて年齢が上昇するにつれ休日の在宅勤務をする割合は大きくなり、それを越えた年齢層では逆に小さくなっていく（図表2-3-10②）。

¹¹ 「在宅勤務」といっても会社が「勤務」と認めているかどうかは問うていない。ほとんどの場合、仕事を持ち帰って行う事実上の「勤務」であると考えられる。後述の「平日の在宅勤務」についても同様である。

（休日の仕事関係のつきあい外出）

「休日のつきあい外出」（「休日に仕事関係のつきあいに出かける」こと）をみると、「よくある」が2.0%、「たまにある」が20.1%となっており、両者合わせて22.1%の夫が休日に仕事関係のつきあいで出かけることがある。妻の年齢別には、「よくある」と「たまにある」との合計の割合でみて、40歳台後半層（23.7%）がもっとも高いが30歳台前半層（22.9%）や40歳台後半層（23.6%）も同程度ある。それより若い層では30歳未満（17.5%）、30歳台前半層（19.3%）と年齢が高くなれば割合も高くなっているが、いずれも20%を切っている。また、50歳台では前半層（21.1%）から後半層（20.2%）へと割合は小さくなるが20%台は維持されている（図表2-3-10③）。

（「平日の在宅勤務」）

「平日の在宅勤務」（「平日の帰宅後家で仕事する」こと）をみると、「よくある」が5.3%、「たまにある」が18.9%となっており、両者合わせて24.2%の夫が平日の帰宅後家で仕事することがある。妻の年齢別には、「よくある」と「たまにある」との合計の割合でみて、40歳台後半層（26.4%）がもっとも高いが30歳台後半層（25.6%）も同程度ある。その間の40歳台前半層（24.0%）はやや低くなっている。若い層では30歳未満（21.4%）、30歳台前半層（22.4%）と年齢が高くなれば割合も高くなっている。また、50歳台では前半層（23.7%）は40歳台前半層と同程度あるものの、後半層（19.2%）は2割を切っている（図表2-3-10④）。

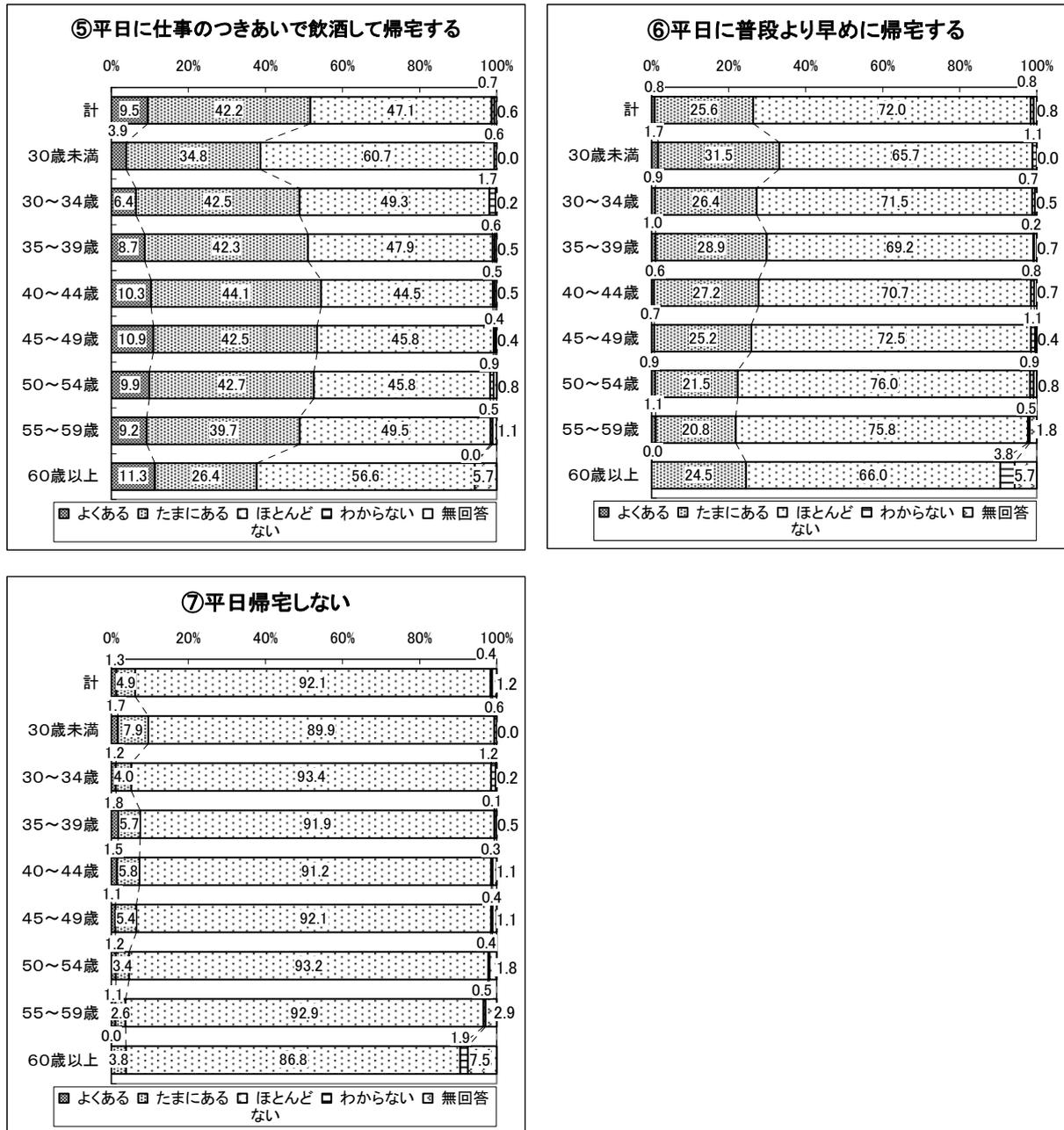
（つきあい飲酒帰宅）

「つきあい飲酒帰宅」（「平日に仕事のつきあいで飲酒して帰宅する」こと）をみると、「よくある」が9.5%、「たまにある」が42.2%となっており、両者合わせて51.7%、半数強の夫が平日に仕事のつきあいで飲酒して帰宅することがある。妻の年齢別には、「よくある」と「たまにある」との合計の割合でみて、40歳台前半層（54.4%）がもっとも高くなっており、それをピークにより若い層では年齢が高くなれば割合も高くなり、より年齢の高い層では年齢が高くなれば割合は低くなる。その中で30歳台前半層は38.7%と4割を切り他の年齢層に比べやや突出して割合が小さくなっている。50歳台後半層（47.9%）も相対的に低くなっているが、それでも半数近くとなっている（図表2-3-10⑤）。

（早めの帰宅）

「早めの帰宅」（「平日に普段より早めに帰宅する」こと）をみると、「よくある」が0.8%、「たまにある」が25.6%となっており、両者合わせて26.4%、4分の1強の夫が平日に普段より早めに帰宅することがある。妻の年齢別には、「よくある」と「たまにある」との合計の割合でみて、30歳未満が33.2%でもっとも高くなっている。30歳台前半層（27.3%）では

図表2-3-10 妻からみた夫の勤務の状況(2)



やや低くなるが、30歳台後半層で29.9%と2番目のピークをつけ、それより年齢の高い層では年齢が高くなれば割合は低くなっている¹² (図表2-3-10⑥)。

〔泊まり〕

「泊まり」(「平日に帰宅しない」こと)をみると、「よくある」が1.3%、「たまにある」が4.9%となっており、両者合わせて6.2%の夫が平日に帰宅しないことがある。妻の年齢別

¹² この設問は主に業務の裁量度との関係を見るために設定したが、この結果を見る限りは管理職における業務の裁量度とはあまり関係がないことが窺われる。むしろ、勤務先の産業・業務特性との関連の深い結果になっているようにもみられる。

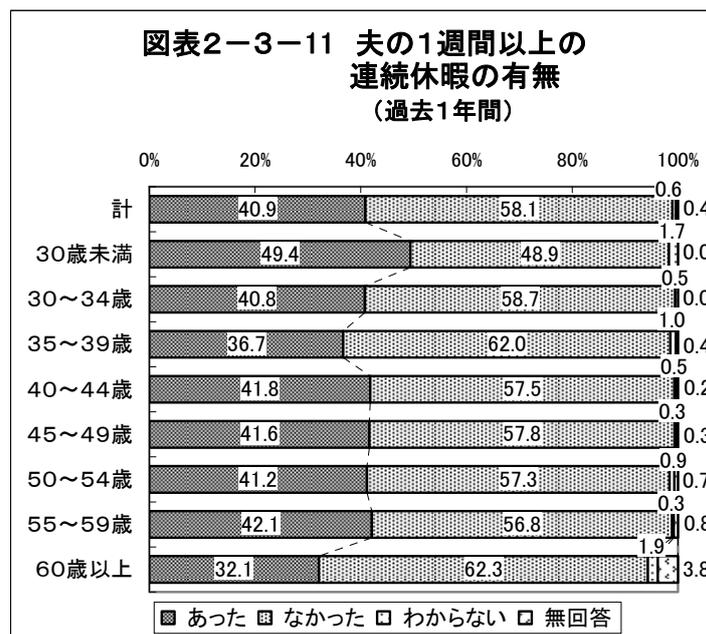
には、「よくある」と「たまにある」との合計の割合でみて、30歳未満が9.6%でもっとも高くなっている。30歳台前半層（5.2%）で低くなるが、30歳台後半層で7.5%と2番目のピークをつけ、それより年齢の高い層では年齢が高くなれば割合は低くなっている（図表2-3-10⑦）。

夫の経常的でない勤務の状況についての結果をまとめてみると、妻の年齢別にみてではあるが、中年層でそうした「勤務」ないし行動をする割合が相対的に高く、それより若い層、高齢の層では中年層よりも低いという緩やかな山型（稜線型）のプロフィールが多くみられた。こうしたことは、いわゆる職場での立場（中間管理職かどうかなど）との関連が背景になっていることが考えられる。一方、「早めの帰宅」や「泊まり」といった勤務状況は、産業特性や現業勤務との関連性が大きな背景となっていることが窺われる。後者にあつては、そうした勤務形態こそが「経常的」であるといえるのであろう。ただし、そうした産業特性等との関連の薄い「泊まり」なども含まれていることも留意しておく必要もあろう。

いずれにしても、こうした所定の勤務時間を越えた変則的な仕事及びそれに関連した行動が少なからずあることは、妻や家庭生活にどのような影響を及ぼしているか、少なくともその実態に気づくことは重要なことであろう。

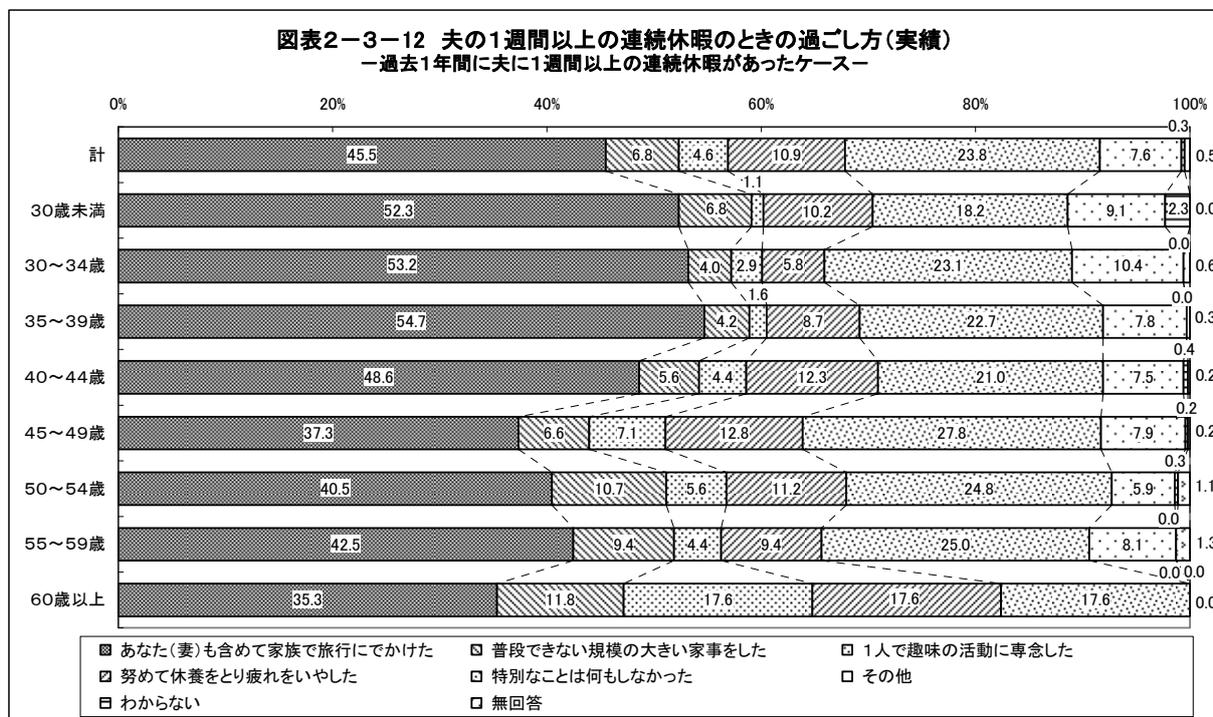
4. 夫の連続休暇（1週間以上）の有無

過去1年間に夫が1週間以上の連続休暇を取得したかどうか尋ねた結果をみると、「あった」とする妻が40.9%となっている。妻の年齢別には、30歳未満では半数程度が「あった」としているが、30歳以上の各年齢層では4割強（35～39歳のみは相対的に低く36.7%）となっている（図表2-3-11）。



(1 週間以上の連続休暇のときの過ごし方)

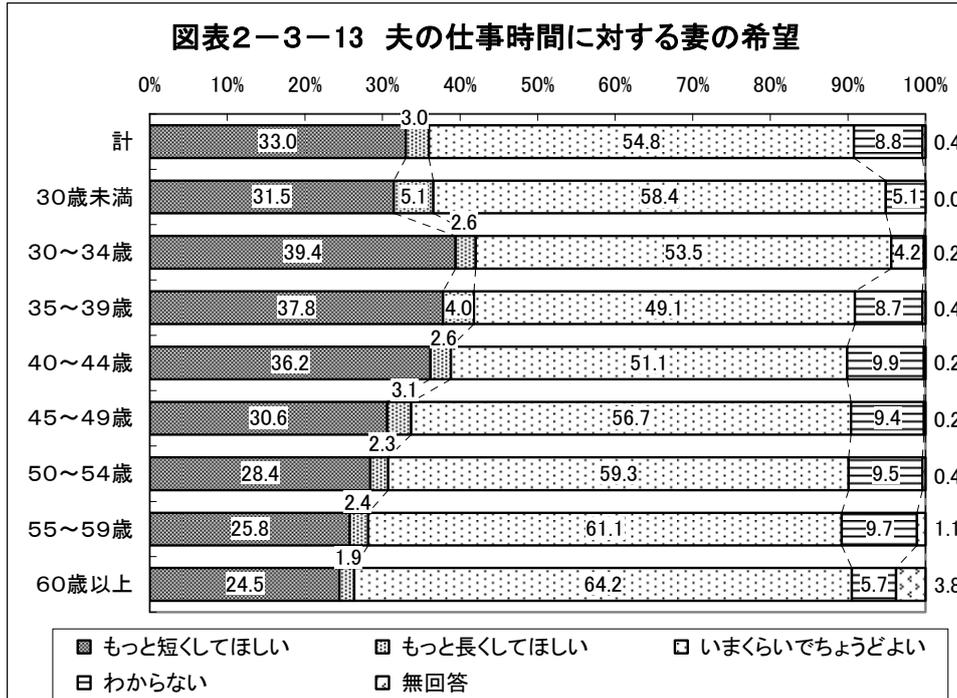
連続休暇を取得したとする妻に、その際に夫はどのように過ごしたのか尋ねた結果をみると、「妻も含めた家族で旅行にでかけた」が 45.5%と最も多く、次いで「特別なことは何もしなかった」が 23.8%となっているほか、「努めて休養をとり疲れをいやした」(10.9%)、「普段できない規模の大きい家事をした」(6.8%)、「1人で趣味の活動に専念した」(4.6%)などとなっている。妻の年齢別にみると、各年齢とも概ねこの順番に変わりはないが、「家族旅行」をした割合は 40 歳台前半層くらいまでは半数程度であるのに対してそれを超える年齢層では 4 割程度で相対的に低くなっている。その一方で、「特別なことは何もしなかった」や「普段できない規模の大きい家事をした」とする割合は、年齢の高い層で相対的に高くなっている (図表 2-3-12)。



5. 夫の仕事時間の長さに対する妻の希望

(1) 夫の仕事時間に対する妻の希望

夫の仕事にかける時間 (以下「仕事時間」という。) の長さに対する妻の希望をみると、「いまくらいでちょうどよい」が 54.8%で半数を超えているものの、「短くしてほしい」とする妻も 33.0%となっており多いとみてよいであろう。一方「長くしてほしい」は 3.0%にとどまっている。妻の年齢別に「短くしてほしい」とする割合をみると、30~34 歳で 39.4%と最も高くなっており、35~39 歳 37.8%、40~44 歳 36.2%と年齢が高くなるほど割合は小さくなっていくものの、55~59 歳でも 4 分の 1 をやや上回る妻が「短くしてほしい」としている。一方、30 歳未満では「短くしてほしい」が 31.5%となっていると同時に、「長くしてほしい」が 5.1%と他の年齢層よりも相対的に高くなっている (図表 2-3-13)。



(短くしてほしい理由／長くしてほしい理由)

妻が夫の仕事時間を「短くしてほしい」理由（複数回答）をみると、「少し無理をしていると思うから」が71.0%で7割を超える妻が挙げており、また「家族と過ごす時間を増やしてほしい」も51.3%と半数を上回る妻が挙げている。妻の年齢別にみると、30歳未満では「少し無理をしていると思うから」（60.7%）よりも「家族と過ごす時間を増やしてほしい」（73.2%）の方が高く、30～34歳でも両者は同じ割合となっている。35歳以上の年齢層になって前者の方が後者を上回る割合となっている。また、40～44歳より若い層では、「早く帰宅して子育てを分担して欲しい」や「早く帰宅して家事を分担して欲しい」を挙げる妻の割合が相対的に高くなっている。このように若い年齢層では、広い意味で家庭生活への配慮を求めて仕事時間を短くしてほしいとする妻が多い（図表2-3-14）。

図表2-3-14 夫の仕事時間を短くしてほしい理由
(短くしてほしい妻)

	少し無理をしていると思うから	早く帰宅して子育てを分担して欲しい	早く帰宅して家事を分担して欲しい	早く帰宅して介護を分担して欲しい	そうあくせく働かなくてもよいから	ご主人自身の趣味を大切にしたい	家族と過ごす時間を増やしてほしい	その他	無回答
計	71.0	15.7	11.3	0.4	12.3	12.7	51.3	6.6	0.0
30歳未満	60.7	42.9	17.9	0.0	12.5	10.7	73.2	1.8	0.0
30～34歳	64.1	34.1	18.0	0.0	6.6	10.8	64.1	5.4	0.0
35～39歳	66.0	27.7	13.5	0.0	10.7	8.5	62.3	6.0	0.0
40～44歳	70.0	17.1	11.3	0.7	9.9	11.5	56.0	6.0	0.0
45～49歳	74.1	5.2	7.9	0.6	13.1	15.7	43.4	6.7	0.0
50～54歳	78.4	1.5	10.4	0.8	15.8	15.8	33.2	8.5	0.0
55～59歳	77.6	0.0	4.1	0.0	22.4	15.3	40.8	10.2	0.0
60歳以上	76.9	0.0	7.7	0.0	30.8	23.1	15.4	15.4	0.0

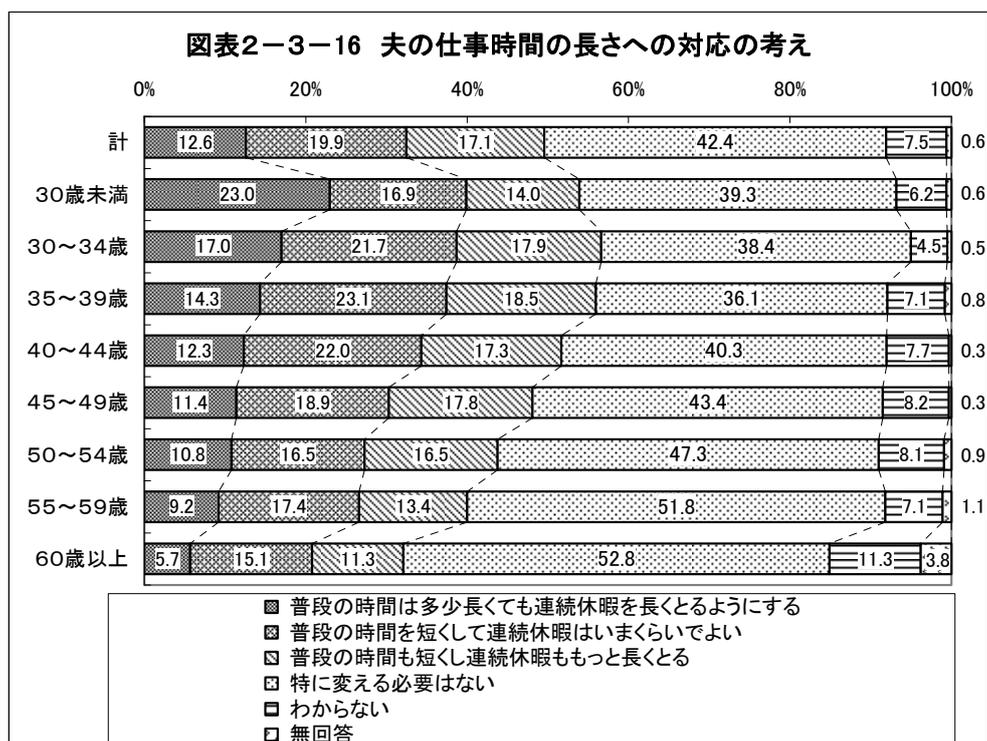
図表2-3-15 夫の仕事を短くしてほしい理由
(長くしてほしい妻) (複数回答、%)

	生活費が 苦しいから	子どもの 教育資金 のため	住宅資金 のため	老後の資 金の備えを したいから	ご主人に まだまだ ゆとりが あるから	その他	無回答
計	58.0	47.3	23.3	30.7	28.0	10.0	1.3
30歳未満	88.9	55.6	44.4	33.3	11.1	0.0	0.0
30～34歳	54.5	72.7	27.3	9.1	18.2	0.0	0.0
35～39歳	70.6	61.8	29.4	29.4	29.4	11.8	5.9
40～44歳	60.0	60.0	23.3	20.0	33.3	6.7	0.0
45～49歳	48.6	40.0	14.3	25.7	22.9	14.3	0.0
50～54歳	42.9	23.8	19.0	66.7	38.1	14.3	0.0
55～59歳	55.6	0.0	22.2	33.3	22.2	11.1	0.0
60歳以上	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0

一方、多くはないけれども数%いる夫の仕事を「長くしてほしい」とする妻の理由をみると、「生活費が苦しいから」(58.0%)や「子どもの教育資金のため」(47.31%)をはじめ生計費や貯蓄に関連した理由を挙げる妻が多くなっている。妻の年齢別にみると、30歳未満で「生活費が苦しさ」(88.9%)を挙げる妻が9割近くに達するなど特に多くなっている。また、「子どもの教育資金」は30歳台や40歳台前半で、「老後の資金の備え」は50歳台前半(66.7%)でそれぞれ割合が特に大きくなっている(図表2-3-15)。

(夫の仕事時間の長さへの対応に関する妻の希望)

夫の仕事時間について、連続休暇も含めて妻がどのようにするのがよいのかを尋ねた結果をみると、「特に変える必要はない」が42.4%となっている中で、「普段の時間を短くして連続休暇はいまくらいでよい」が19.9%、「普段の時間を短くし連続休暇ももっととる」17.1%、

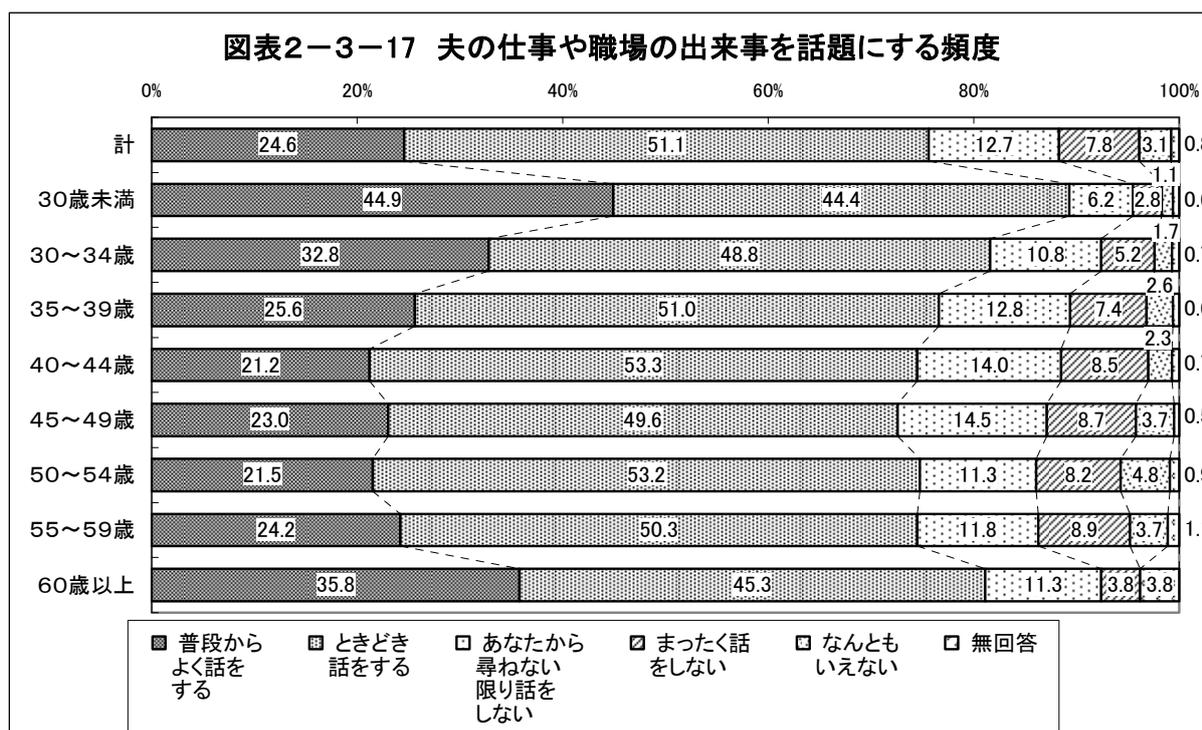


「普段の時間は多少長くても連続休暇を長くとするようにする」12.6%となっている。これら三つを合わせて、半数近くの妻が何らかの形で夫の仕事時間の短縮を希望しているといえる。妻の年齢別にみると、「特に変える必要はない」の割合は、30歳台までは4割を下回っており、40歳以降年齢が高い層ほど割合が高くなる傾向があり、若い層では何らかの変化を求める割合が高い。その中では、30歳未満では「普段の時間よりも連続休暇」(23.0%)とする割合が相対的に高くなっているなど、若い層ほど「普段の時間よりも連続休暇」を挙げる割合が高くなっている。「連続休暇よりも普段の時短を」とする割合は、30歳台から40歳台前半層にかけて2割を超え相対的に多くなっている。また、「普段の時短も連続休暇も」とする割合も同様に30歳台から40歳台前半層にかけて相対的に多くなっている(図表2-3-16)。

6. 夫の仕事・職場の出来事が夫婦の話題となるかどうか

以上、仕事をめぐる夫の生活時間に関する妻の認識や希望等に関する調査結果をみてきたが、第3節の最後に、こうした夫の仕事や職場の出来事がどのくらいの頻度で夫婦間の会話の中で話題とされるのかをみておきたい。

年齢計では、「ときどき話をする」が51.1%でもっとも多く、次いで「普段からよく話をする」24.6%となっており、4分の3強の夫婦が夫の仕事や職場のことを話題に上らせている。一方、「あなた(妻)から尋ねない限り話をしない」が12.7%、「まったく話をしない」は7.8%となっている。妻の年齢別には、若い層で「普段からよく話をする」の割合が高く、一方、年齢が高くなるほど「あなたから尋ねない限り話をしない」(40歳台がピーク)や「まったく話をしない」が相対的に高くなる傾向がみられる。(図表2-3-17)。

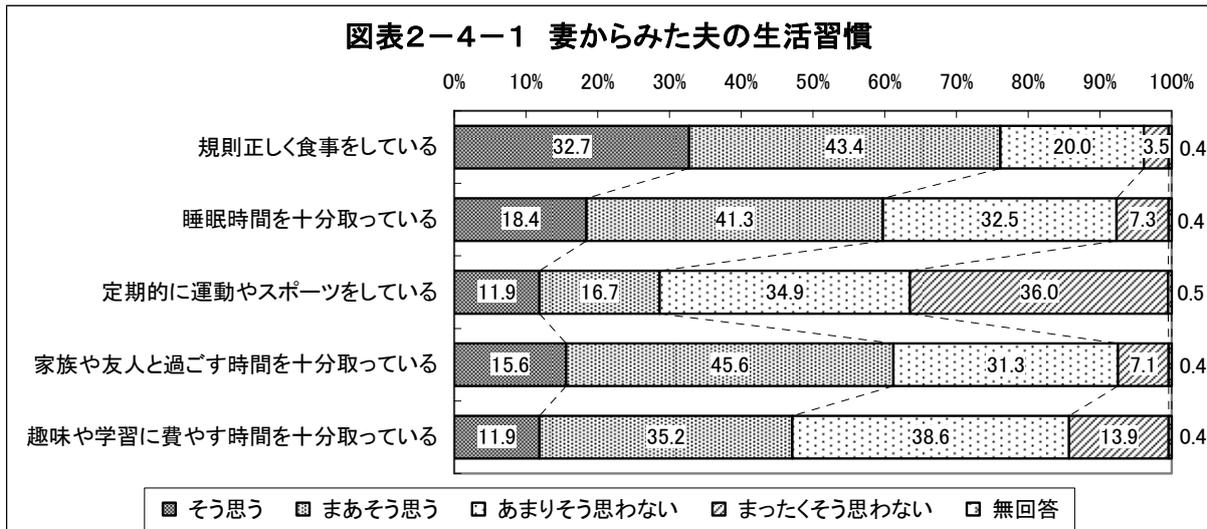


第4節 生活習慣と健康状況

この節では、妻からみた夫の生活習慣や健康状況とともに、妻自身の健康状況を尋ねた結果をみる。

(1) 妻からみた夫の生活習慣

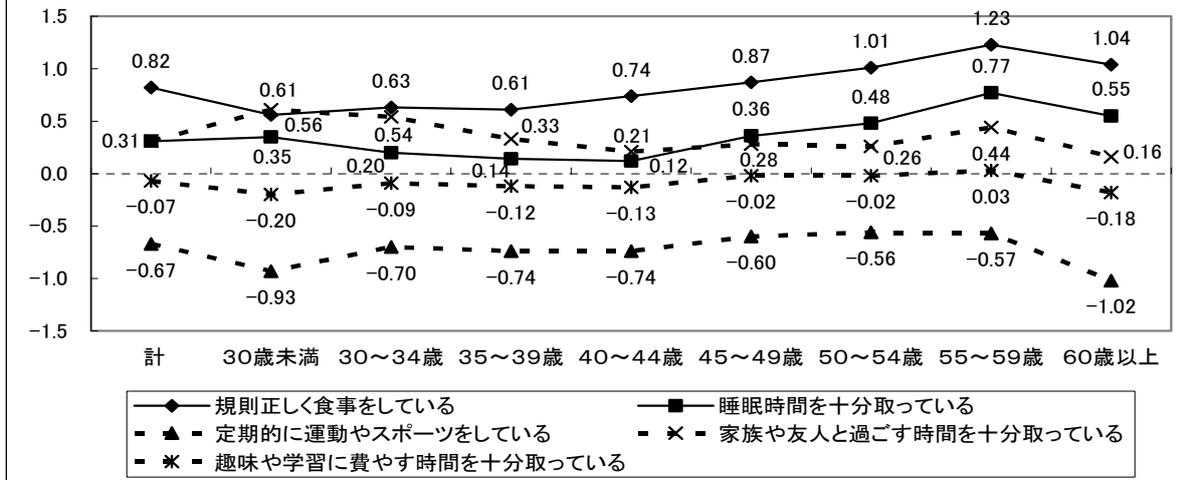
夫には「普段次のような習慣がありますか」として妻に尋ねた結果をみてみよう。提示した5つの設問の中でもっとも該当するとの割合が高かったのは「規則正しく食事をしている」で、「そう思う」が32.7%、「まあそう思う」43.4%で合わせて76.1%となっている。「そう思う」と「まあそう思う」とを合わせた割合をみると、「家族や友人と過ごす時間を十分に取っている」(61.2%)や「睡眠時間を十分に取っている」(59.7%)では相対的に高く、一方、「趣味や学習に費やす時間を十分に取っている」(47.1%)は半数を下回り、「定期的に運動やスポーツをしている」(28.6%)は3割弱にとどまっている。とはいえ、夫が「睡眠時間を十分に取っている」とは思っていない妻が4割程度おり、「規則正しく食事をしている」でも4分の1に近い妻がそうは思っていないことには、注目しなければならないといえる(図表2-4-1)。



(妻の年齢別にみた夫の生活習慣スコア値)

夫の生活習慣についての妻の判断を妻の年齢別にみるために、回答状況の構成比からスコア値に変換してみた。変換の方法は、図表2-4-2の脚注にあるようによく行われるものによった。その結果をみると、「睡眠時間を十分に取っている」は30歳台から40歳台前半のスコア値が相対的に低く、50歳台になって高くなっていることが指摘できる。また、「規則正しく食事をしている」では、おおむねすべての年齢層で他の項目よりも高くなっているものの、年代間の比較をすると30歳台まで相対的に低くなっていることも指摘できる。一方、「趣味や学習に費やす時間を十分に取っている」は若い層で相対的に高く、40歳以降は相対的に低くなっている(図表2-4-2)。

図表2-4-2 妻からみた夫の生活習慣(構成比によるスコア値)

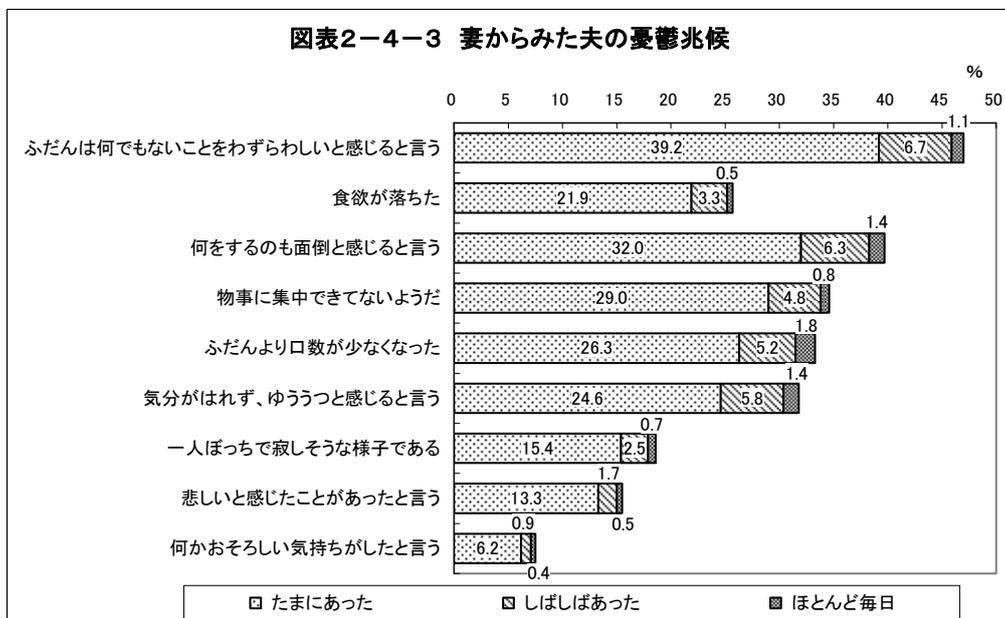


(注) 「そう思う」=2、「まあそう思う」=1、「あまりそう思わない」=-1、「まったくそう思わない」=-2として、構成比(無回答を除く)に乗じてスコア値を算出した。

(2) 妻からみた夫の憂鬱兆候の有無¹³

夫に憂鬱兆候を妻がどの程度感じているかどうかを尋ねた結果をみると、提示した9つの憂鬱兆候に対して、さすがに「ほとんど毎日」とする妻は1%内外とわずかであるが、「しばしばあった」を合わせた割合では、「ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じると言う」

図表2-4-3 妻からみた夫の憂鬱兆候



(注) このほかの選択肢には「まったくなかった」があり、これと無回答は掲示していない。

¹³ 憂鬱兆候(抑うつ度)は、心理検査を参考として、JILPTの主任研究員である小倉一哉が長時間労働に関する調査を行う際に調査項目として盛り込み、分析の対象としてきたものである(JILPT労働政策研究報告書No.22「日本の長時間労働・不払い労働時間に実態と実証分析」(2005年)など参照)。今回の「労働時間・本体調査」においても、関連の10項目が設問として盛り込まれたことから、「妻調査」においても本人でなく妻に対して夫の状態を訊くという点から適宜文言調整をした上で、設問としたものである。

(7.8%)、「何をするのも面倒と感じると言う」(7.7%)、「気分がはれず、ゆううつと感じると言う」(7.2%)、「ふだんより口数が少なくなった」(7.0%)、「物事に集中できていないようだ」(5.6%)では5%を超えている。さらに、「たまにあった」まで含めれば、これらの項目では3割を超える割合となっている(図表2-4-3)¹⁴。

(妻の年齢別にみた夫の憂鬱度スコア値)

妻の年齢別にその特徴をみるために、前項同様スコア値を試算した。これをみると、年齢が高い層ほどスコア値が高くなる傾向がみられるものに「ふだんは何でもないことをわざわざわしいと感じると言う」や「物事に集中できていないようだ」があり、30歳台40歳台で相対的にスコア値が高くなっている項目に「ふだんより口数が少なくなった」や「気分がはれず、ゆううつと感じると言う」などがある(図表2-4-4)。

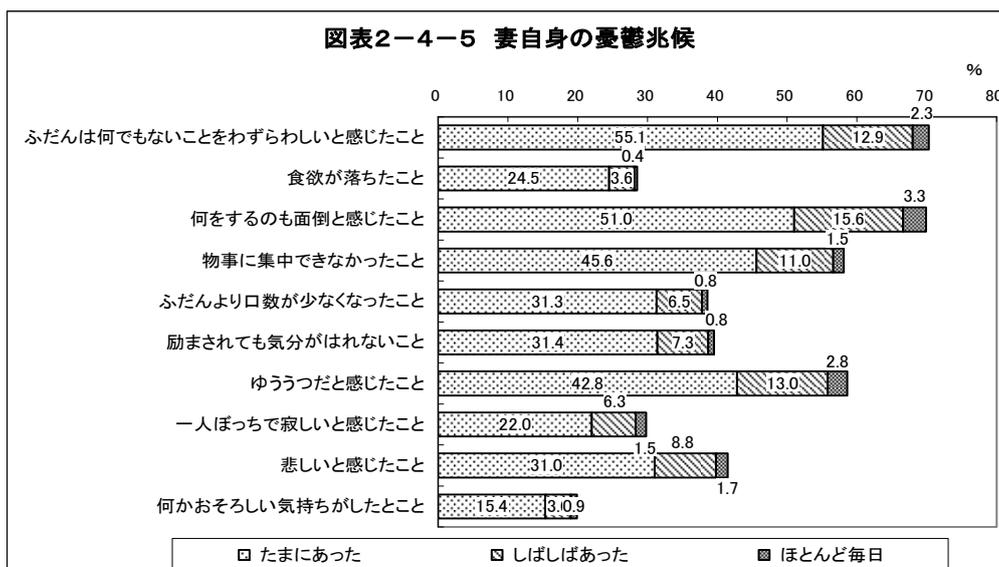
図表2-4-4 妻からみた夫の憂鬱兆候(構成比によるスコア)

	計	30歳未満	30~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50~54歳	55~59歳	60歳以上
ふだんは何でもないことをわざわざわしいと感じると言う	0.57	0.48	0.48	0.57	0.56	0.58	0.61	0.59	0.58
食欲が落ちた	0.30	0.32	0.38	0.32	0.31	0.27	0.32	0.21	0.28
何をするのも面倒と感じると言う	0.49	0.53	0.47	0.52	0.49	0.47	0.50	0.49	0.44
物事に集中できてないようだ	0.41	0.39	0.37	0.42	0.39	0.40	0.46	0.46	0.38
ふだんより口数が少なくなった	0.43	0.40	0.41	0.46	0.44	0.41	0.43	0.38	0.30
気分がはれず、ゆううつと感じると言う	0.41	0.36	0.42	0.43	0.41	0.40	0.41	0.38	0.30
一人ぼっちで寂しそうな様子である	0.23	0.24	0.16	0.22	0.24	0.22	0.24	0.24	0.16
悲しいと感じたことがあったと言う	0.18	0.21	0.18	0.19	0.17	0.18	0.20	0.16	0.14
何かおそろしい気持ちがあったと言う	0.09	0.12	0.08	0.11	0.08	0.09	0.08	0.08	0.18

(注)「まったくなかった」=0、「たまにあった」=1、「しばしばあった」=2、「ほとんど毎日」=3のスコアを与え、構成比(無回答を除く)に乗じてスコアを算出した。

(3) 妻自身の憂鬱兆候の有無

妻自身の憂鬱兆候についても尋ねているが、その結果をみると、提示した項目について「ほとんど毎日」であったとする割合は多くても数%までにとどまっているが、「しばしばあった」



(注) このほかの選択肢には「まったくなかった」があり、これと無回答は提示していない。

¹⁴ 憂鬱兆候は本来自己評価を前提としたものであるが、妻とはいえ夫の内面についてまで問うことにはやや無理がある。そこで、夫がそうしたことを表白したことなど外面から評価できる設問にしている。

と合わせた割合で見ると、「何をするのも面倒と感じたこと」が 18.9%ともっとも多く、次いで「ゆううつだと感じたこと」(15.8%)、「ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じたこと」(15.2%)、「物事に集中できなかったこと」(12.5%)、「悲しいと感じたこと」(10.5%)が 10%を上回っている。さらに「たまにあった」も含めた割合をみると、「ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じたこと」(70.3%)、「何をするのも面倒と感じたこと」(69.9%)、「ゆううつだと感じたこと」(58.6%)、「物事に集中できなかったこと」(58.1%)といった項目が高く、半数を大きく超えている(図表2-4-5)。

(妻の年齢別にみた妻自身の憂鬱度スコア値)

上述の夫の場合同様、妻の年齢別に憂鬱度をスコア値によってみると、年齢階層間でジグザグの動きとなっている場合が多く、大きな特徴をとらえることは容易ではない。その中で、各項目においてもっとも高いスコア値を示している年齢層をみてみると、「ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じたこと」や「何をするのも面倒と感じたこと」など 30 歳台が相対的に多くなっていることを挙げることはできる(図表2-4-6)。

妻の憂鬱兆候の該当割合は、上述の妻からみた夫のそれよりもおしなべてかなり高くなっているといえる。これは、前者が自身の内心の感覚状況に基づくものであるのに対して、後者は夫の言動などを通して妻が感じ取ったものであり、後者の方が低く出がちであると考えられることによる見方もできる。一方、現在の家庭生活においては、夫よりも妻に様々な負担を強いていることの反映とみることもできよう。いずれにしろ、夫にせよ妻にせよ、憂鬱兆候を示す割合はけっして少ないとはいえないことは留意する必要がある。

図表2-4-6 妻自身の憂鬱兆候(構成比によるスコア)

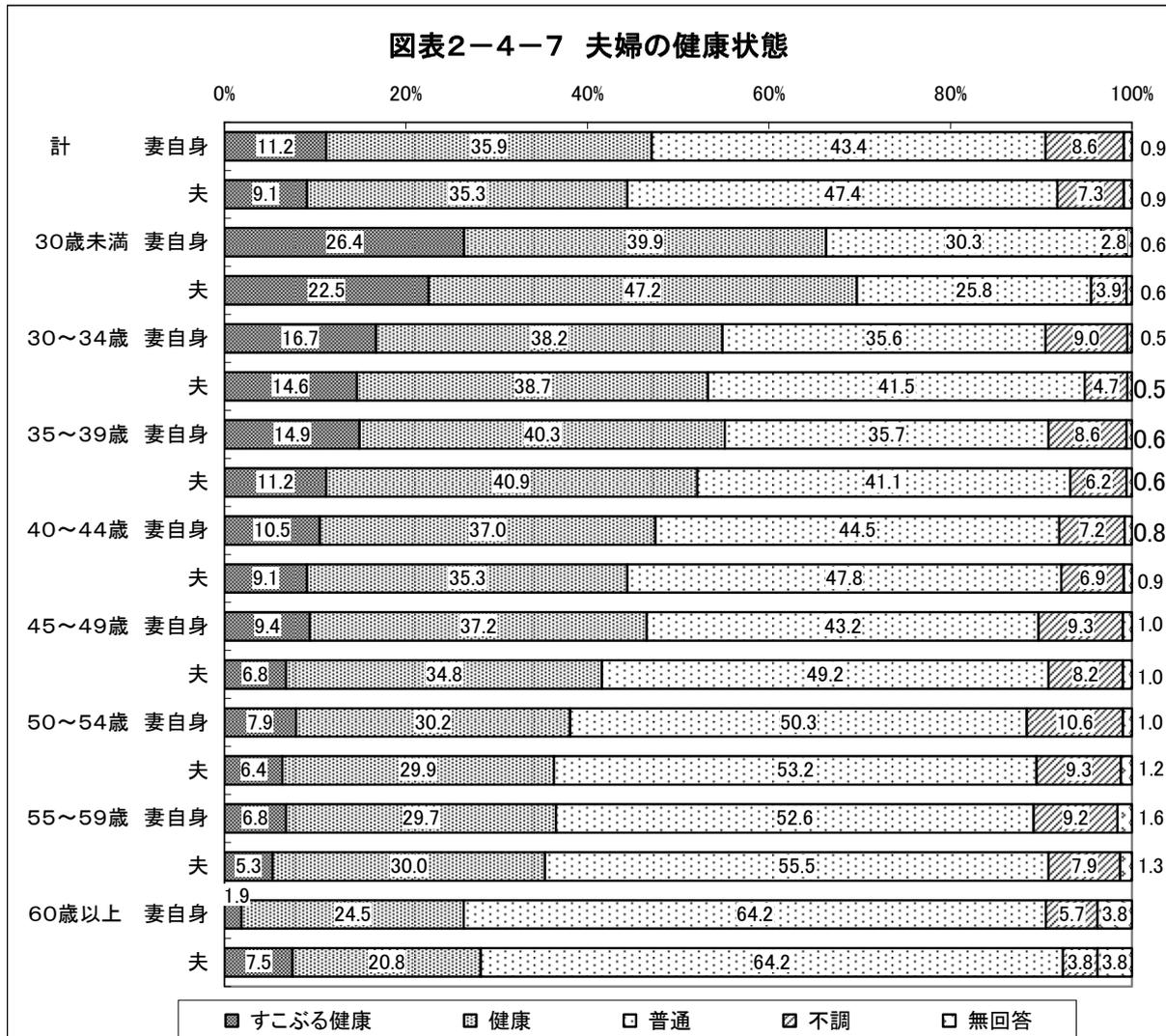
	計	30歳未満	30~34歳	35~39歳	40~44歳	45~49歳	50~54歳	55~59歳	60歳以上
ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じたこと	0.89	0.80	0.91	0.91	0.85	0.93	0.88	0.85	0.80
食欲が落ちたこと	0.33	0.29	0.39	0.31	0.32	0.34	0.33	0.37	0.34
何をするのも面倒と感じたこと	0.93	0.82	0.98	0.98	0.89	0.95	0.91	0.91	0.78
物事に集中できなかったこと	0.73	0.60	0.69	0.73	0.69	0.77	0.76	0.74	0.65
ふだんより口数が少なくなったこと	0.47	0.47	0.48	0.47	0.46	0.46	0.50	0.46	0.38
励まされても気分がはれないこと	0.49	0.50	0.51	0.49	0.47	0.50	0.50	0.46	0.50
ゆううつだと感じたこと	0.78	0.78	0.79	0.78	0.76	0.81	0.78	0.71	0.70
一人ぼっちで寂しいと感じたこと	0.39	0.43	0.41	0.42	0.39	0.38	0.40	0.32	0.38
悲しいと感じたこと	0.54	0.60	0.55	0.53	0.54	0.53	0.57	0.49	0.48
何かおそろしい気持ちがあったこと	0.25	0.23	0.28	0.27	0.24	0.25	0.26	0.24	0.28

(注)「まったくなかった」=0、「たまにあった」=1、「しばしばあった」=2、「ほとんど毎日」=3のスコアを与え、構成比(無回答を除く)に乗じてスコアを算出した。

(4) 夫及び妻自身の健康状況

妻自身及び(妻からみた)夫の健康状態を尋ねた結果をみると、年齢計では妻自身及び夫とも「普通」(妻自身: 43.4%、夫: 47.4%)がもっとも多く、「健康」(同 35.9%、35.3%)がこれに続き、「すこぶる健康」(同 11.2%、9.1%)は1割程度となっている。一方、「不調」(8.6%、7.3%)は「すこぶる健康」の割合を下回る割合にとどまっている。妻の年齢別にみると、30歳未満では「健康」の割合がもっとも高く、次いで「普通」が多いが、「すこぶる健康」も「普通」に迫る割合となっている。これが、年齢が高くなるにつれて、「すこぶる

健康」の割合が低くなり、「健康」も概ね低くなる一方、「普通」の割合が年齢とともに大きくなっている。また、「不調」の割合は、夫については年齢の上昇とともに概ねわずかずつ高くなっているのに対して、妻自身については30歳前半（9.0%）と50歳前半（10.6%）とを二つのピークとした動きとなっている（図表2-4-7）。



第5節 妻の生活イメージと生活満足度

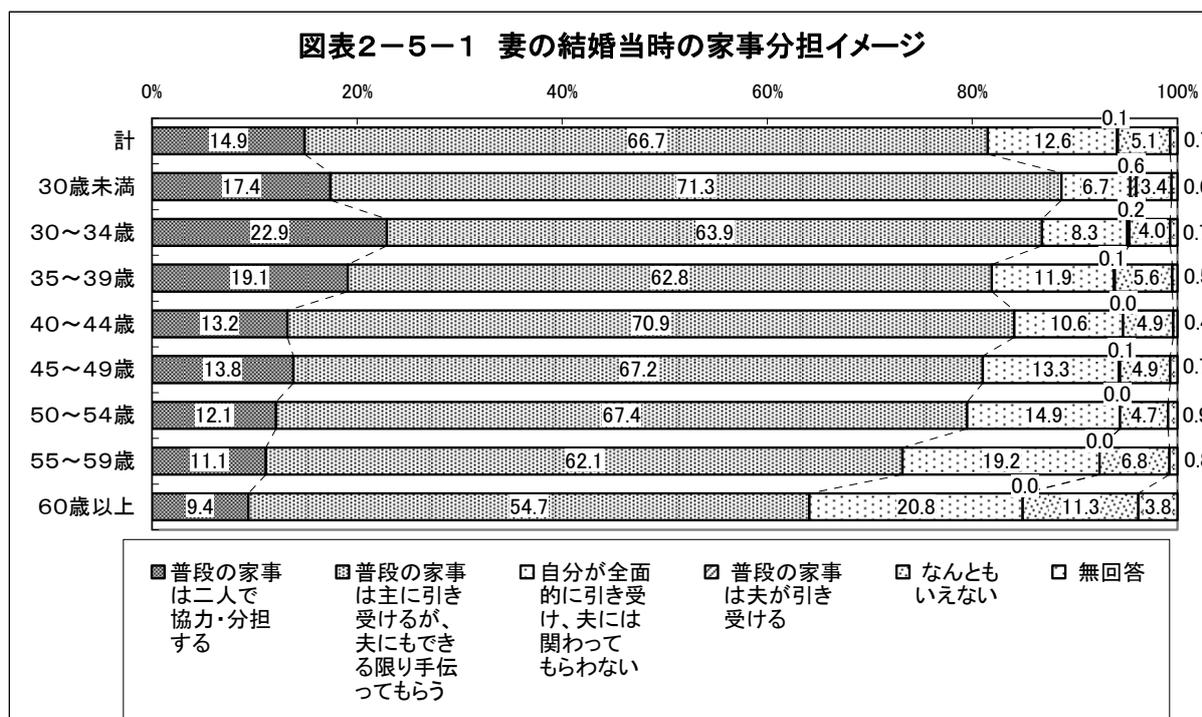
「妻調査」では、妻の結婚当時の生活イメージ（期待ないし希望）とその実現度を尋ね、さらに実現されていない場合に夫の仕事時間との関係があると思うかどうかを尋ねている。その上で、さまざまな生活側面に関する妻の満足度を調査した。また、「老後」における夫婦二人だけの生活に関して持っているイメージも訊いている。これらの結果をみてみよう。

（1）結婚当時の妻の家事分担イメージとその実現度

結婚当時に妻が抱いていた夫との（普段の）家事分担イメージを尋ねた結果をみると、年

年齢計では「普段の家事は主に（妻が）引き受けるが夫にも手伝ってもらう」（以下「妻担当・夫手伝い」という。）が 66.7%で3分の2の妻がこれを挙げている。次いで「普段の家事は二人で協力・分担する」（「夫婦共同分担」）が 14.9%、「自分（妻）が全面的に引き受け、夫には関わってもらわない」（「妻全面担当」）12.6%となっており、「夫婦共同分担」の割合が「妻全面担当」の割合を上回っている。ただし、「普段の家事は夫が引き受ける」（「夫全面担当」）は、若い層で若干みられる程度で年齢計では 0.1%とごくわずかとなっている。

妻の年齢別にみると、「夫婦共同分担」の割合は、30歳未満(17.4%)から30～34歳(22.9%)にかけて高くなった後、年齢が高い層ほど低くなっている。一方、「妻全面担当」の割合は、一部に例外はあるものの年齢が高くなるほど高くなっている。また、「妻担当・夫手伝い」の割合は、40～44歳で70.9%と前後の年齢よりも高くなっている。こうしたデータからは、妻の家事分担イメージは「妻全面担当」から「妻担当・夫手伝い」へと移行が始まり、近年になって「夫婦共同分担」へと意識がシフトしてきたといえそうである（図表2-5-1）。

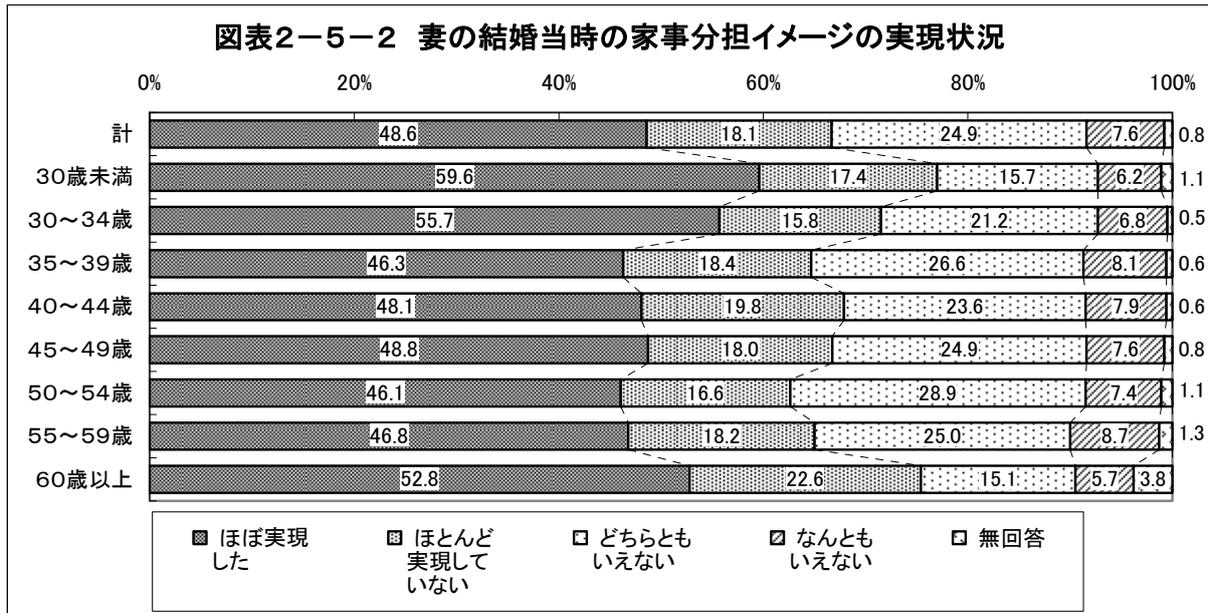


（結婚当時の家事分担イメージの実現度）

このような結婚当時妻が抱いていた家事分担イメージが調査時点で実現したと考えているかどうかをみると、「ほぼ実現した」が 48.6%で半数程度を占めている一方、「ほとんど実現していない」は 18.1%と2割弱となっている。ただし、「どちらともいえない」が 24.9%、「なんともいえない」7.6%と判断留保が3割強を占めている。妻の年齢別にみると、「ほぼ実現した」は30歳台前半以前の若い層で割合が相対的に高くなっている。「ほとんど実現していない」は40～44歳で他の年齢層よりも相対的に高くなっており、総じて若い層よりも中年期においてやや高い傾向がみられる。「どちらともいえない」は、若い層で割合が相対的に

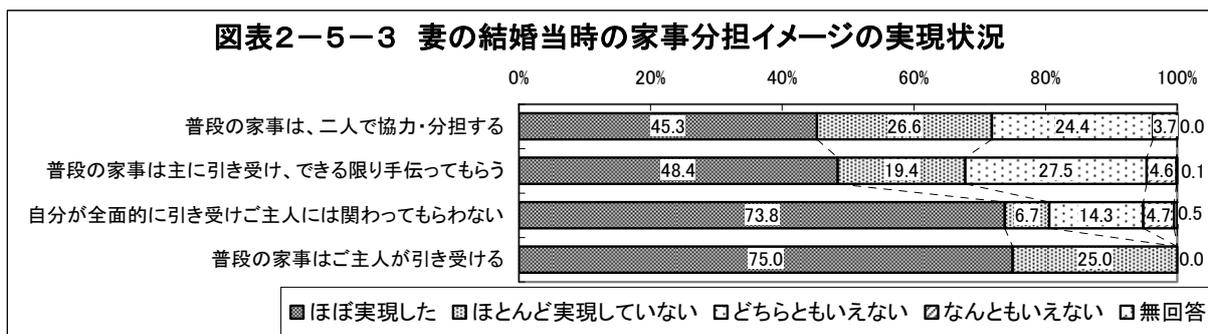
低く、35歳以降の年齢層で相対的に高くなっている（図表2-5-2）。

この実現度は、現在までの結婚生活の経験等を通じて評価されていると考えられる。したがって、若い層で「ほぼ実現した」とする割合が相対的に高いことは、生活における生涯イベントにさほど遭遇していない段階の評価であるという面を考慮しておかなければならないであろう。また、「実現していない」という明確な断定評価は、結婚後それほど期間を経過しない段階で形成されてしまい、その後はそれが維持されているとも考えられる。



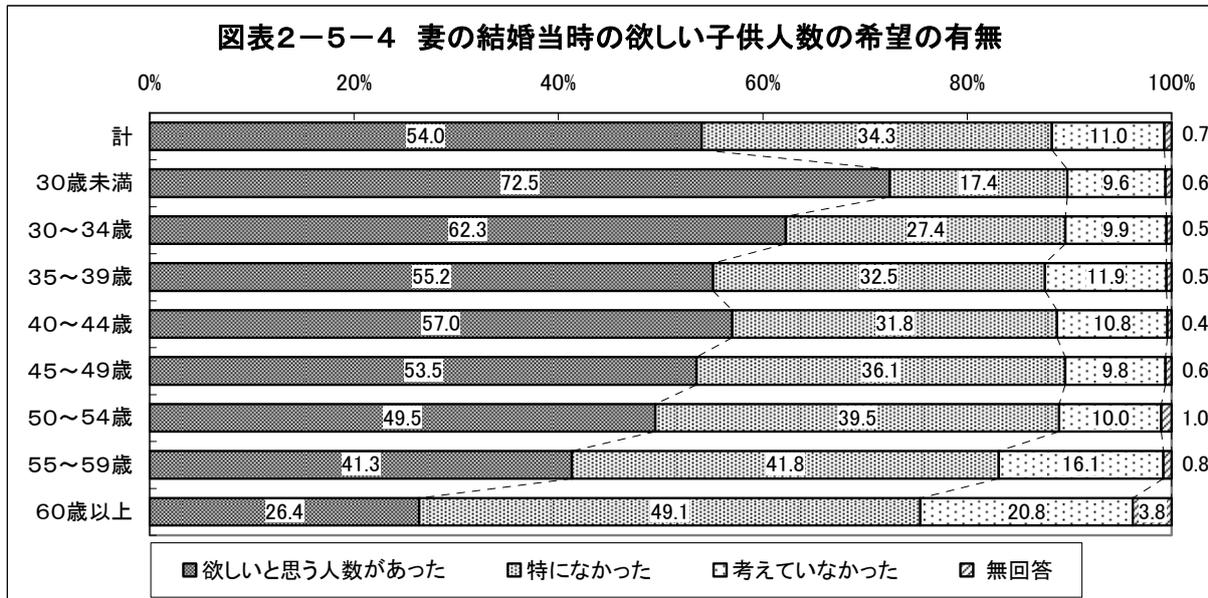
(イメージ別実現度)

家事分担イメージの実現度というとき、どのようなイメージが実現されたのかが気になるところである。そこで、先のイメージ別に実現度を集計した結果をみると、「妻全面担当」で「ほぼ実現した」が7割を超えているのに対して、「夫婦共同分担」や「妻担当・夫手伝い」では半数に満たず、後2者では「ほとんど実現していない」や「どちらともいえない」がかなりの割合となっている。先の家事分担イメージの分布から判断されるように、未実現方向の評価をしているのは、夫の家事参加を伴う分担イメージの場合が多いことが窺われる（図表2-5-3）。



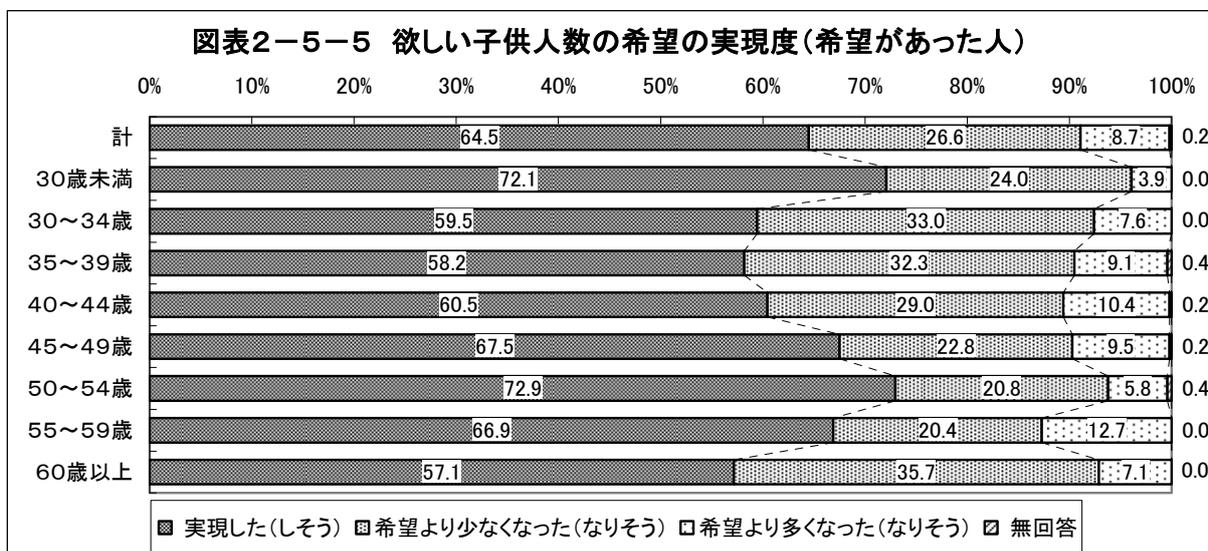
(2) 結婚当時における欲しい子どもの人数の有無とその実現度

妻自身に結婚当時欲しいと思う子どもの人数があったかどうかを尋ねた結果をみると、年齢計では「あった」が54.0%、「特になかった」が34.3%、「考えていなかった」11.0%となっている。妻の年齢別には若い層ほど「あった」とする割合が高く、一方、「特になかった」は年齢が高い層ほど割合が高くなっている（図表2-5-4）。



(欲しい子ども人数の実現度)

結婚当時欲しい子どもの人数があったとする妻にその実現度を尋ねた結果をみると、年齢計では「実現した（しそう）」が64.5%と3分の2弱の妻が希望は実現した又はしそうであるとしている一方、「希望より少なくなった（なりそう）」とする妻が26.6%おり、「希望より多くなった（なりそう）」の8.7%の3倍の割合となっている。妻の年齢別にみると、「実

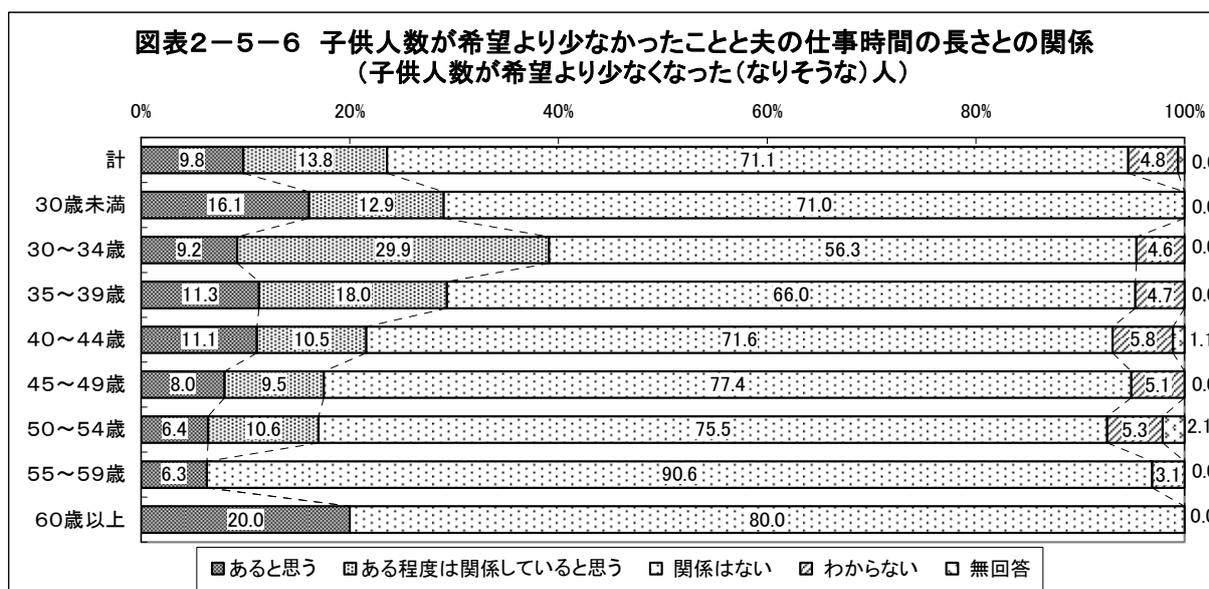


現した（しそう）」の割合は、30歳未満を除けば30歳前半から40歳前半の比較的若い層で相対的に低く、それを超える年齢層で高くなっている。逆に、「希望より少なくなった（なりそう）」の割合は、若い層で高く、年齢の高い層で相対的に低くなっている（図表2-5-5）。

（希望より少なくなったことと夫の仕事時間の長さとの関係）

子どもの数が希望よりも少なくなった（なりそう）とする妻に、そのことの原因として夫の仕事時間が長いことがあると思うかどうかを尋ねた結果をみると、年齢計では「関係はない」とする割合が71.1%である一方で、9.8%の妻が「あると思う」と回答し、「ある程度は関係していると思う」（13.8%）を合わせると、2割を超える妻が程度は別として要因の一つとなっていると考えている。妻の年齢別にこれら二つを合わせた割合をみると、30～34歳で39.1%と高くなっており、次いで35～39歳（29.3%）、30歳未満（29.0%）など若い層で相対的に高くなっている（図表2-5-6）。

若い層を中心に、希望よりも子どもの人数が少なくなる要因の一つとして夫の仕事時間の長さがあると思う妻が少なくないといえる。



(注) 子供の人数が、結婚当時の希望よりも少なくなった(なりそう)理由の一つとして、夫の仕事時間が長いことがあると思うかどうか尋ねた結果である。

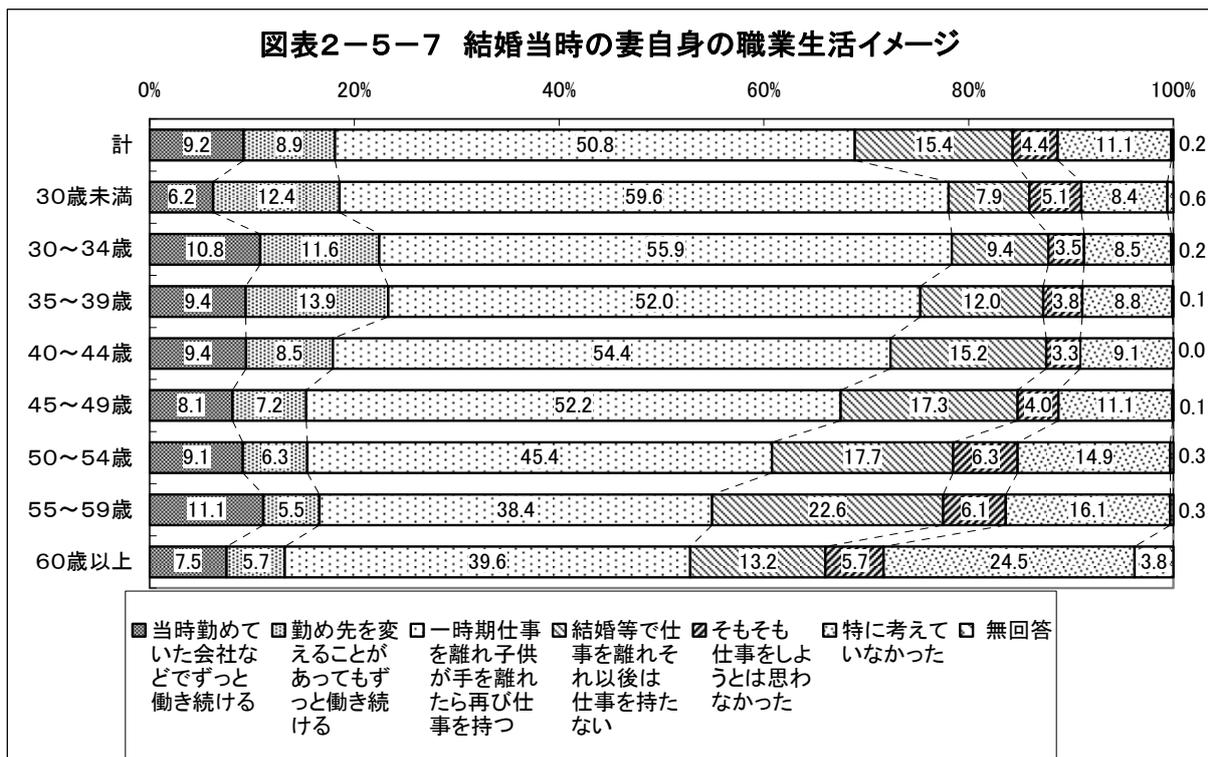
少子高齢化が問題とされる中で、人数面も含めて子どもを持ちたい女性の希望を少しでも多く実現させることが求められている。今回の調査では、例えば30～34歳の妻を取り上げるなら、62.3%が欲しい子どもの人数があるが、そのうち33.3%、すなわち全体の20.8% (= 62.3% × 0.333) がその人数を実現できずそれよりも少なくなりそうであると考えている。その理由には種々のものがあるだろうが、その中で夫の長時間労働が影響していると思う妻が39.1%あり、全体の中の割合になおせば8.1% (20.8% × 0.391) となる。あくまで妻の意識

による判断・評価であり、割合の水準自体決して大きいといえるものでは必ずしもないが、この問題の喫緊性を考慮すれば、こうした面からも男性（夫）の仕事にかかる時間に関する議論が行われてもよいであろう。

（3）結婚当時の妻自身の職業キャリア・イメージとその実現度

結婚当時に妻が抱いていた自身の生涯職業キャリアのイメージをみると、年齢計では「一時期仕事を離れ子どもが手を離れたら再び仕事を持つ」（以下「一時子育て専念後再参入型」という。）が 50.8%と最も高く、次いで「結婚等で仕事を離れそれ以後は仕事を持たない」（「専業主婦型」）が 15.4%、「当時勤めていた会社などでずっと働き続ける」（「勤務終身継続型」）9.2%、「勤め先を変えることがあってもずっと働き続ける」（「勤め先移動勤務継続型」）8.9%となっている。なお、「そもそも仕事をしようとは思わなかった」は 4.4%、また、「特に考えていなかった」が 11.1%となっている。妻の年齢別にみると、「一時子育て専念後再参入型」は各年齢層でもっとも割合が高くなっているものの、40歳台までの相対的に若い層では5割を超えているが50歳台後半では4割を下回るなど、年齢の高い層では相対的に低くなっている。また、「勤め先移動勤務継続型」も若い層ほど高い割合を示し、年齢が高くなるほど低下している。一方、「専業主婦型」の割合は年齢の高い層ほど高く、また、「特に考えていなかった」も年齢の高い層で高くなっている。「勤務終身継続型」は各年齢層とも1割前後の割合であり、年齢による目立った傾向的違いは見あたらない（図表2-5-7）。

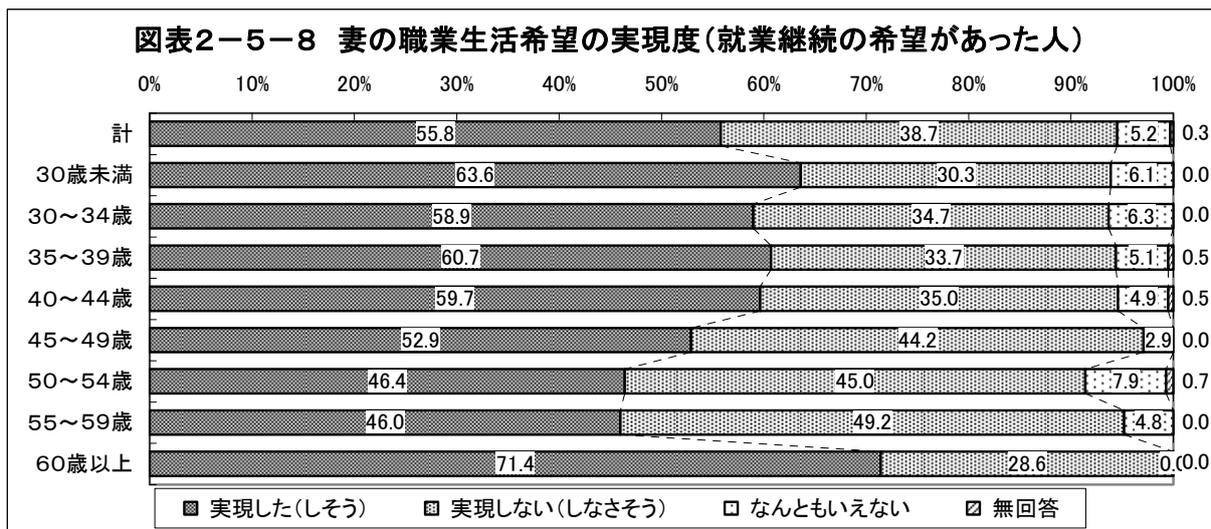
この結果をみる限りにおいて、結婚当時に妻が持つ職業イメージは、この間において、終身雇用的な継続勤務をイメージする層が1割程度で変わらずに推移する中で、「専業主婦」イ



メージを持つ妻が減少し、子育て後再参入イメージへとシフトしてきており、近年にはそれがときどきの状況に応じて勤務先（就業形態も？）を変えながら、子育てとの両立をしつつ仕事を継続するイメージへとさらにシフトし始めているということができそうである。

（職業キャリアのイメージの実現度）

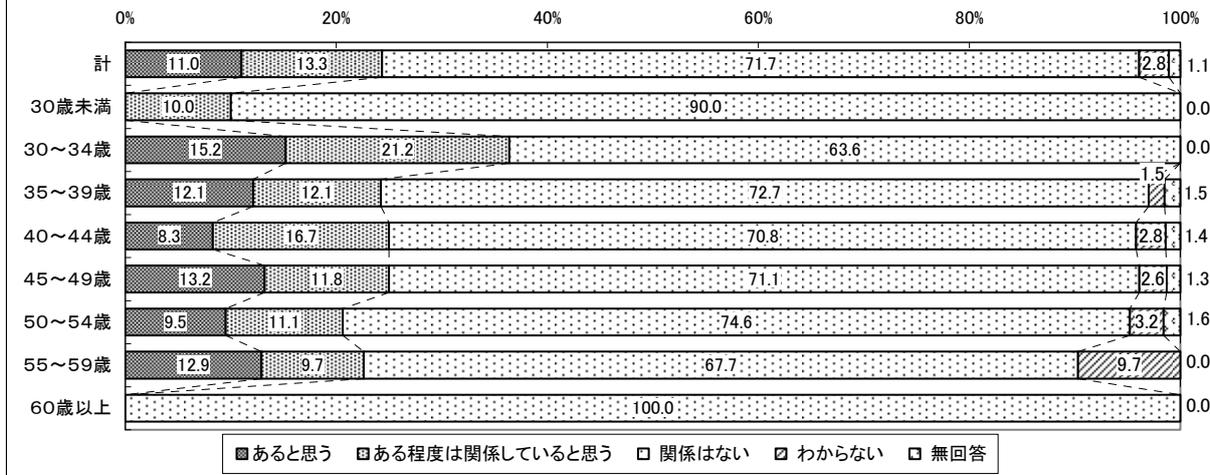
「勤務終身継続型」又は「勤め先移動勤務継続型」であるとの回答のあった妻に対して、すなわち、とりたてて中断することなく仕事を継続することを希望（イメージ）していた妻に対してその実現度を尋ねた結果をみると、年齢計では 55.8%が「実現した（しそう）」としており、一方「実現しない（しなさそう）」は 38.7%となっている。妻の年齢別には、40歳前半層まではそれぞれ6割程度と3割台半ばで推移しているのに対して、それ以降の年齢層では「実現」の割合が低下し、「未実現」の割合が上昇し、50歳台では両者が拮抗ないし「未実現」が「実現」をやや上回ってもいる（図表2-5-8）。この結果からは、近年は、妻自身が仕事の継続を希望すれば、それが実現出来る場合が多くなってきているともいえる。



（仕事の継続希望が実現しなかったことと夫の仕事時間の長さとの関係）

仕事の継続を希望していたものの実現できなかった（しなさそうな）妻に対して、その理由として夫の仕事時間が長いことがあると思うかどうかを尋ねた結果をみると、年齢計では「関係はない」とする割合が 71.7%である一方で、11.0%の妻が「あると思う」と回答し、「ある程度は関係していると思う」（13.3%）を合わせると、4分の1弱の妻が程度は別として要因の一つとなっていると考えている。妻の年齢別にこれら二つを合わせた割合をみると、30~34歳で36.4%と高くなっており、次いで45~49歳、40~44歳（いずれも25.0%）など30歳未満（10.0%）を除く相対的に年齢の高い層で年齢計と同程度の水準となっている（図表2-5-9）。

図表2-5-9 妻の就業継続希望が実現できなかったことと夫の仕事時間の長さとの関係
(就業継続希望が実現できなかった(しなさそうな)人)



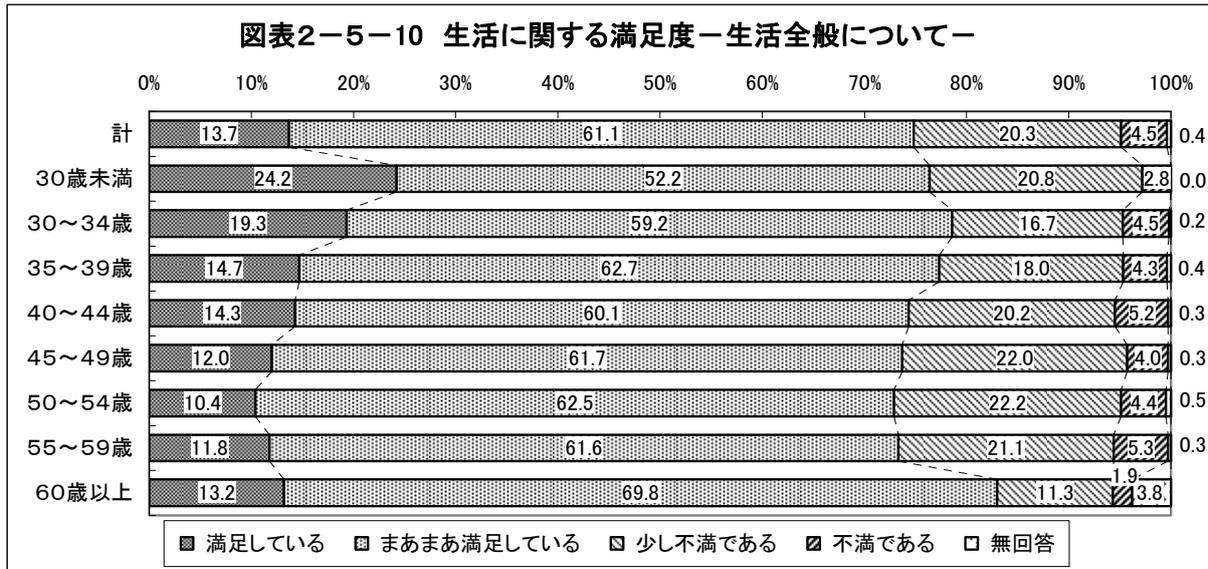
(注)妻の就業継続希望が実現しなかった(しなさそうな)理由の一つとして、夫の仕事時間が長いことがあると思うかどうか尋ねた結果である。

上述の欲しい子どもの人数の場合と同様に、30～34歳を例にとって若干の考察をしておきたい。女性の志向するキャリア・パターンには種々のものがあってよいが、その中で結婚当時において就業を中断することなく継続していくことを希望していた妻は、30～34歳で22.4%であった。そのうち34.7%、すなわち全体の7.8% (=22.4%×0.347) がそれを実現できなさそうであると考えている。その理由には種々のものがあるだろうが、その中で夫の長時間労働が影響していると考える妻が36.4%あり、全体の中の割合になおせば2.8% (7.8%×0.364) となる。あくまで妻の意識による判断・評価であり、割合の水準自体大きいといえるものでは必ずしもないが、こうした面からも男性(夫)の仕事にかける時間に関する議論が行われてもよいであろう。

なお、希望するキャリア・パターンとして子育て等で一時期仕事から離れることを考えている女性(妻)にあっても、夫の仕事時間がより整合的なものであれば、就業を継続するキャリア・パターンを選択したであろう可能性は十分考えられるところであるが、今回の調査ではそこまでの調査はしなかった。分析上の課題としたい。

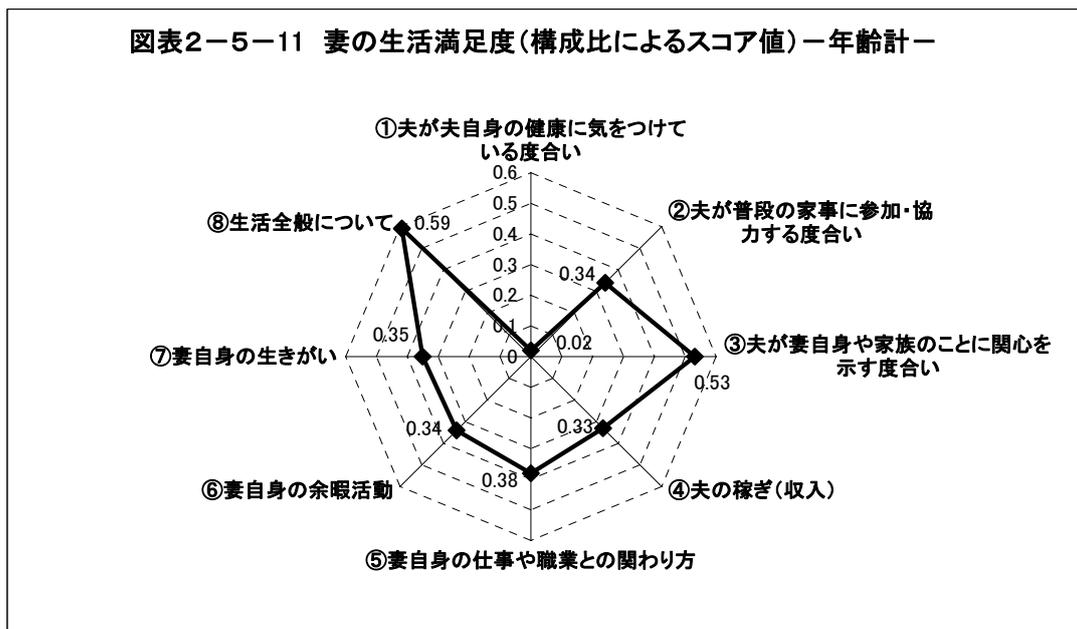
(5) 妻の生活満足度

妻の生活に関する満足度を尋ねた結果をみておこう。まず「生活全般」についてみると、年齢計では「まあまあ満足している」(以下「まあまあ満足」という。)が61.1%と最も多く、「満足している」(「満足」)の13.7%と合わせて4分の3の妻が満足方向と回答している。一方、「不満である」(「不満」)は4.5%、「少し不満である」(「少し不満」)は20.3%であり、4分の1が不満方向の回答であった。妻の年齢別にみると、年齢が若い層ほど「満足」の割合が高く、総じて年齢が高くなるにつれて「満足」の割合は小さくなり、代わって「まあまあ満足」や「少し不満」の割合がやや高くなる傾向がみられる(図表2-5-10)。



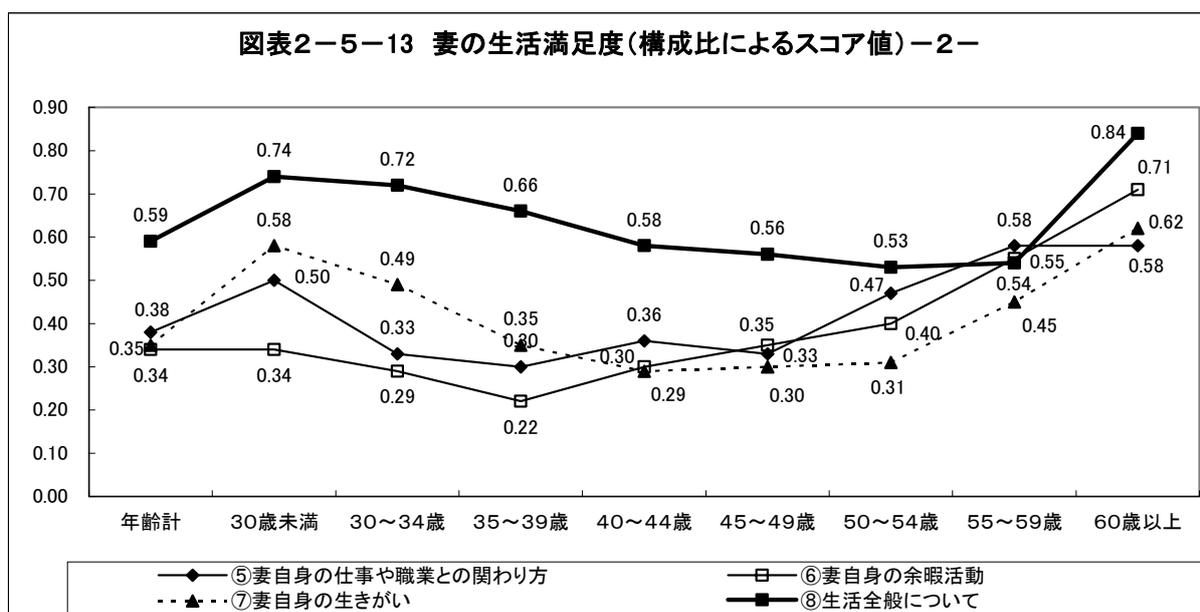
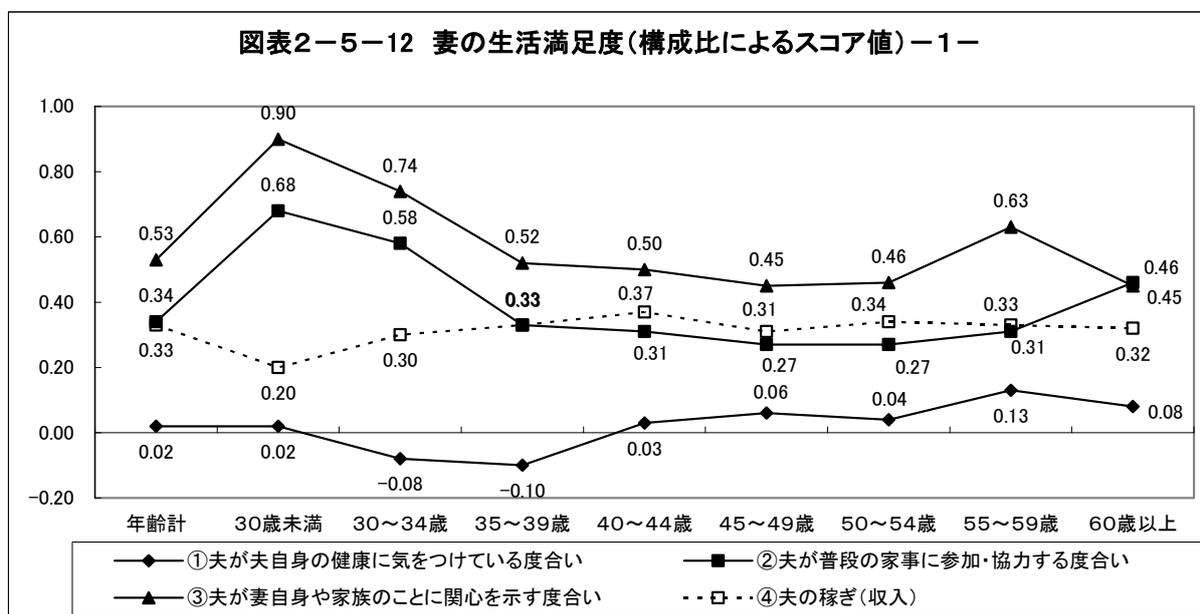
(満足度スコア値による表現)

ついで、各項目に関する満足度をみてみよう。一覧的に把握できるように、構成比（無回答を除く）を用いて「満足度スコア値」を計算してみた。その方法は、図表2-5-11の脚注にあるとおりである。年齢計についての結果をみると、「生活全般」のスコア値が0.59といずれの項目別のそれよりも高い値を示しており、項目別には「夫が妻自身や家族のことに関心を示す度合い」が0.53と項目の中でもっとも高くなっており、他のほとんどの項目は0.33～0.38と0.3台の半ばである。その中で、「夫が夫自身の健康に気をつけている度合い」が0.02と満足方向と不満方向が相半ばするようなスコア値を示している（図表2-5-11）。



(注) スコアは、「満足している」に2点、「まあまあ満足している」に1点、「少し不満である」に-1点、「不満である」に-2点を与え、それぞれ構成比(無回答を除く)に乗じたものを足し合わせて求めた。

妻の年齢別に満足度スコア値をみてみよう。「生活全般」についてスコア値を確認しておく、先に構成比でみたように、30歳未満が0.74でもっとも高く、年齢が上がるにつれてスコア値は低下傾向にある。このように総じて若い層でスコア値が高く年齢とともに低下する傾向がみられる項目に「夫が普段の家事に参加・協力する度合い」や「夫が妻自身や家族のことに関心を示す度合い」、「妻自身の生きがい」が指摘できる。ただし、これらの項目では50歳台前半から後半にかけてスコア値が下げ止まりないし反転上昇するのが共通してみられている。また、30歳台くらいまでの若い層ではスコア値が低下傾向にありその後反転して年齢とともに上昇している傾向がみられるものに「妻自身の仕事や職業との関わり方」や「妻自身の余暇活動」がある。スコア値がもっとも低い「夫が夫自身の健康に気をつけている度合い」は、30歳台ではマイナスとなっている。なお「夫の稼ぎ」をみると、若い層において



では年齢とともに高くなり 40 歳前半 (0.37) がもっとも高くなるが、それ以降の年齢では 0.3 台前半の水準で推移している (図表 2-5-12 及び 13)。

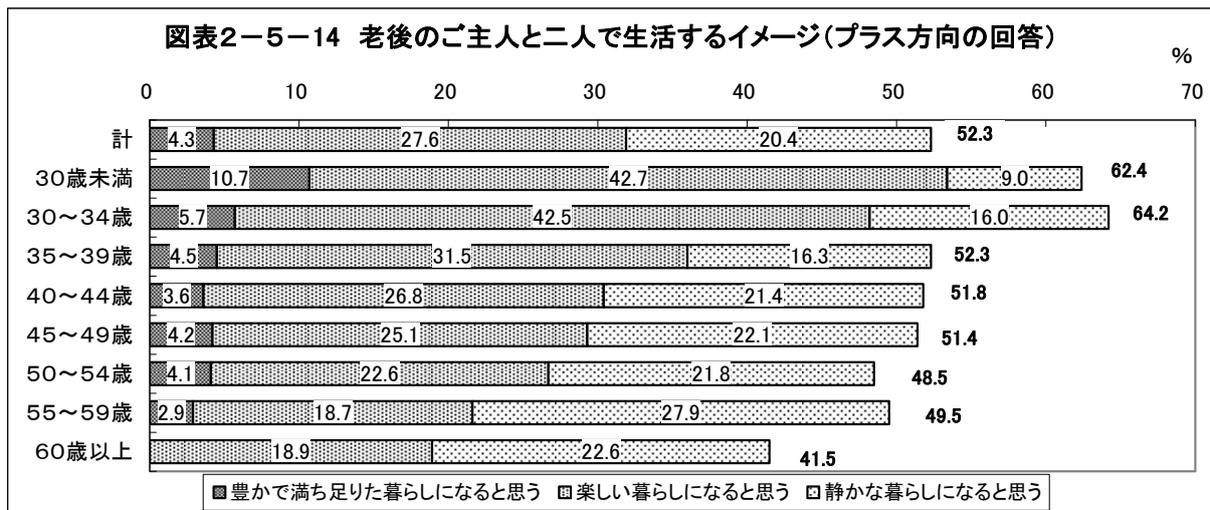
(6) 老後の夫婦の生活イメージ

老後に夫が職業を離れ、夫婦二人で生活するとなった場合のイメージを尋ねた結果をみてみよう。

提示した 9 つの項目 (選択肢/択一式) をイメージとしてプラス方向の回答、マイナス方向の回答、そして回答が困難であったと思われるものの 3 つに分類して示すこととする。この 3 つの分類を概観すると、年齢計でみてプラス方向の回答が 52.3% と半数強の妻が「老後の 2 人暮らし」を肯定的に捉えている。マイナス方向の回答は 23.2% で、また、回答が難しいとするのが 24.4% とそれぞれ 4 分の 1 弱を占めている。妻の年齢別には、若い層でプラス方向の割合が相対的に高く、逆にマイナス方向の割合は年齢が高い層で相対的に高くなっている。

(プラス方向の回答)

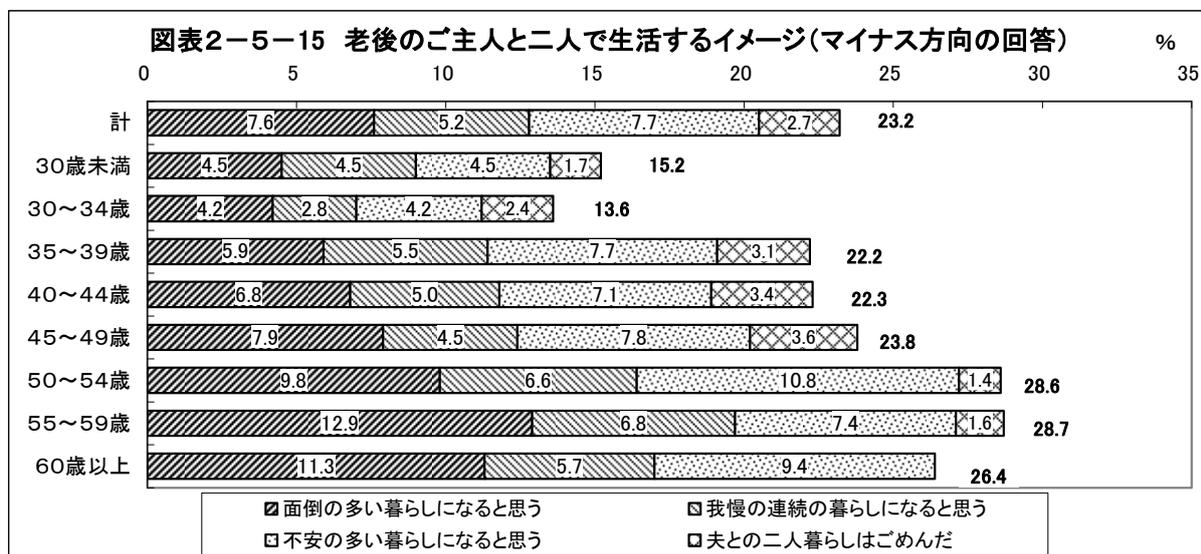
プラス方向の中の項目をみると、年齢計で「楽しい暮らしになると思う」が 27.6% ともっとも多くなっており、また、この項目はすべての項目の中でもっとも割合が高くなっている。次いで「静かな暮らしになると思う」が 20.4%、「豊かで満ち足りた暮らしのなると思う」は 4.3% となっている。妻の年齢別には、「楽しい暮らしになる」は 30 歳未満や 30~34 歳では 4 割を超えているのに対して 50 歳台では 2 割程度と年齢が上がるにつれて低くなる傾向がみられる。「豊かで満ち足りた暮らしのなる」もほぼ同様の傾向がみられる。一方、「静かな暮らしになる」は、年齢の高い層ほど高くなる傾向がある (図表 2-5-14)。



(マイナス方向の回答)

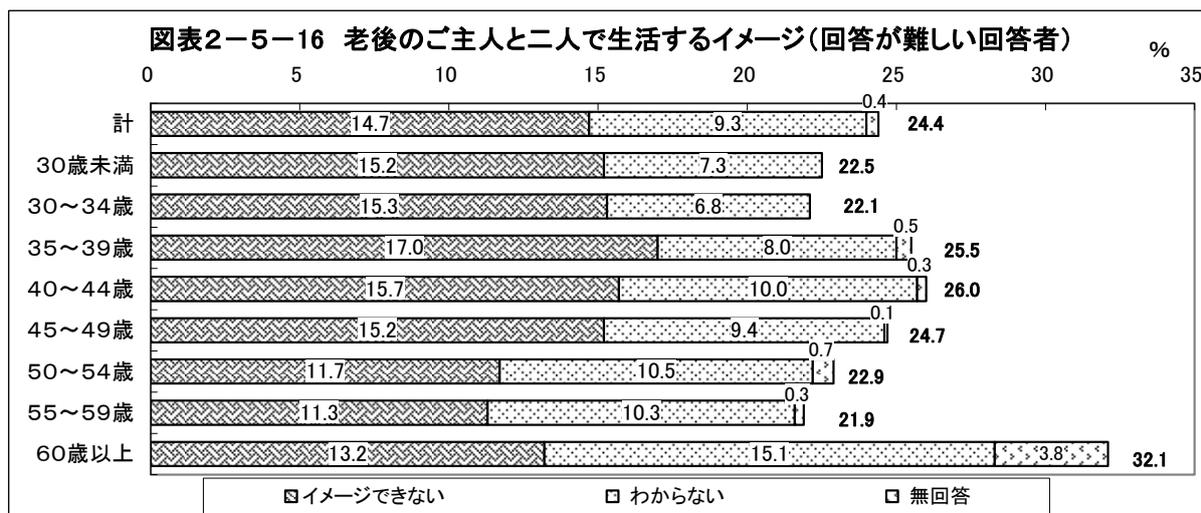
マイナス方向の回答をみると、年齢計で「不安の多い暮らしになると思う」7.7%、「面倒の多い暮らしになると思う」7.6%、「我慢の連続の暮らしになると思う」5.2%などとなって

おり、「夫との二人暮らしがごめんだ」とする妻も 2.7%いる。妻の年齢別にみると、「ごめんだ」以外の3つの項目では、年齢の高い層ほど割合が高い傾向がほぼみられている。なお、「ごめんだ」の割合はいずれの年齢層も数%以下の水準であるが、30～40歳台で相対的に高くなっている（図表2-5-15）。



(回答が難しかったと思われるもの)

「イメージできない」など回答が難しかったと思われる回答をみると、年齢計では「イメージできない」が 14.7%、「わからない」9.3%などとなっている。妻の年齢別には、「イメージできない」の割合は40歳台まではほぼ15%程度であるのに対して50歳台では11～12%程度と断層がみられる。「わからない」の割合も30歳台と40歳台との間に境目がみられ、年齢の高い層の方で相対的にやや高くなっている（図表2-5-16）。



以上の結果からは、夫婦が年輪を重ねるとともに、「豊かさ」や「楽しさ」よりも「静かさ」を老後生活にイメージする妻が増える中で、一方で、「面倒」や「不安」を覚える層も増大するといえそうである。